（昭和五年五月二十四日 第三種郵便物認可）　昭和十三年二月十五日　千曲時報　第九十五號　（一）

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　香山清和
發行所　長野縣上田市千曲町　上田絲織專門學校會
印刷所　長野縣上田市眉山　中澤印刷所

笠岳に遭難者を救ふ

絲三　宮田　修

此の記事は去る正月四日、本校學生山岳部員の一行—宮田修、小口宗久、内海浩、阿形一三、目崎武美、宮田皓、北村元三郎—の七君がスキーツアー中志賀高原、吹雪の笠岳山中に尊い人命を救助した模様を宮田君がありのまゝ書いたものである。

○

「人命救助」は餘りにもありふれた新聞の三面記事の平凡な材料でしかないかもしれぬ。然し「自己が先づ救はれ度い時に然も能く人を救ふ」は無力な人類には出來さうもない事だ。吾々は此の意味に於て此の度の事件により五十年の人生行路中最も尊い經驗を得たものと思つて居る。

一、菅平より笠岳へ

吾々の一行七名は元氣一杯菅平から須坂へと胸のすく樣な壯快な十六粁の滑走を經て午前十一時山田温泉着、此處にて充分なる晝食を取り防寒具、スキー等の再點檢をなし萬端の用意を整へてシールを付ける。時正に正午。愈々未知の山岳地帶に入る。深い谷川に沿ふて登る頃になると雲行き悪く荒模樣となる。

進む事六粁、山田牧場小屋を左に見る。小屋の親爺が無愛想な顏をぬつと出して大聲で我々を呼び止めた。危いから止せと注意してくれたのだ。成程笠岳は吹雪に包まれて見えない。風も强い。寒氣も相當に厳しい。

此處から熊の湯迄四時間はかゝると云ふ時計は一時半を指して居る。途中で暗くなるのは必定だ。此の場合誰もが一度は考慮し躊躇する所であらう。だが然し我々七名の若人は此處迄來て自然の脅威に負け度くはなかつた。飽く迄も大自然の暴威に耐え得て笠岳踏破の快哉を叫びたかつたのだ。

『行かう』

其れが吾々の當然の業務の如く、獲物を前にして猛り立つた龍虎の樣に猛然と吹雪を衝いて進み出たのである。

一番　ラッセル　目崎（甕二）
二番　指導標係　内海（絲三）
三番　地形觀測　阿形（甕三）
四番　全　宮田（兄）（絲三）
五番　豫備班　宮田（弟）（絲二）
六番　全　北村（甕一）
七番　ラスト　小口（絲三）

かねて申合せた順序に並び愈々自然對人類の大爭鬪の幕は切つて落されたのである。

吾等一行の出る前に相當のパーテーが通つたらしく微かながらシュプールが見える。横からなぐり付ける程の凄い風に吹き飛ばされさうだ。

大きな雪庇が千仞の斷崖をカムフラジュして居る。トップの目崎が此が大雪庇に引懸りあはやと言ふ所で命を拾つたり綱とも頼む指導標を見失ひかけたり實に豫想外の難コースだ。

かくして辛うじて笠岳鞍部を過ぎ愈々下りになる。丈餘の積雪に膝を沒する深い澤が無數に横に靡き凄慘なる氣溢れ數限り無い樅の大樹氷が幾度か我々の行手に立ち塞がり白熊かとも疑はれる。今度はアノラッグで眼と鼻丈出て居る顏に眞向ふから雪が吹き込む。指導標を見出すにも一苦勞だ。口も眼も眉毛も眞白、鼻の先に五糎許りのつらゝが下り忽ち人相が一變して仕舞ふ。

斯くて二十分も下つたらう。先頭が『おーい、先のパーテーに追ひ付いたぞ』と叫ぶのが聞えた。

一同は占めたと許り勇氣百倍ピッチが上る。

二、遭難者發見

『遭難だ、〳〵』とけたゝましく目崎は叫ぶ。成程近付いて見れば先のパーテーらしい十二三名と三人の遭難者が小さな尾根の裾に一塊に塊まつて吹雪に行き惱みなす事なく呆然として居るのだ。

もう行途には道もない。大自然の反逆兒に對する怒りからか、木も草も土も丈餘の銀雪に埋れつくして、非力な人類の心を彌が上にも押付けて行くのだ。流石强心臓を以つて自負する吾等七名の胸底にも同じ遭難の悲壯な運命に陷込まんとする危惧の念が黑雲の樣に湧いて來るのだつた。

『救はれ度い。此の大自然の激怒から』

然し自分自身藁をも摑み度い苦境にあつても三人の瀕死者を後に自己の安全を計る事は出來ない。

『俺達は救はなければならないのだ』

其れが山を歩く者の當然の義務なのだ。

『スキーを脱げ』

ラストの小口は愕然として叫んだ。救助作業にはスキーが手足纏ひだからだ。だが砂漠を旅する者の生命が水筒にあるが如く冬山を歩くものゝ生命はスキーにある。砂漠の眞只中で例へ一時でも水筒を捨てよと言はれたらどうだらう？　誰か潔く水筒を捨てるものがあらうか。然も我々は脱がなければならない。生命から二番目のスキーを……。

遭難者三人の中の青年一人（大澤氏）はもはや息がない。全身は硬直して半眼を開き彼の連れである女性のリックサックを脊負つたまゝ倒れて居るのである。

恐らくは可弱い女性の身を最後迄かばつたのであらう事が周圍の狀況からしてもはつきり譯る。女は泣いて居る。

『貴男もう駄目なの。返事をして〳〵』

呼べども叫べども答なき男の腕にすがつて身も世もなく嘆く女の聲が吹き荒ぶ嵐と共に薄暗くなつた深山に流れる。もう一人の青年も凍えて瀕死だ。夕闇が迫つて來るのだ。此のまゝでは危險だ。救援隊を呼ばなければならない。

三、第一班（報告班）山を下る。

しかし此の難路を踏破して熊の湯迄急報する事は決死的である。何里あるのか、又如何なる危險が前途に横たはつて居るのか、五里霧中の此の嵐のさ中に我々はすべく虎狼の岩窟へ送つたのである。決然内海、阿形、宮田（弟）の三名を急報さ

『行つて來るぞ』

『行つて來て呉れ。頼むぞ』

と二組離れ〴〵になつて此れが死出の別れとなるかも知れないであらう最後の言葉を短く交はして三名の姿が灰色の雪の彼方に消えて行つた。

三名を送つて殘つた四名（小口、目崎、宮田、北村）は彼等三名の悲なからむ事を心に祈りながらも先づ捨てられてあつた遭難者のスキーで橇を造つた。そして敢然と自分がリックの麻繩を切つて橇に結び引張つても見た。

だがどうしたと言ふのであらう。先刻迄十數名から居つた他の一行は、もはや遭難者を見捨て内海君等の死の苦闘を續けて作つた雪道を一言の挨拶もなく殆んど全部が下つて行つてしまつて居たのである。

折角橇を作つても此の嵐の大雪の中で、此れ許りの人數でどうして假死狀態にある人間を運ぶ事が出來やう。慘たるかな！　努力の結晶とも言ふべきスキー橇はまるで凍付いた樣に押しても引張つても動かうともしないのだ

女は其の男の身に抱き付いた切り離れやうともしない。死ぬなら一緒に死なして呉れと言ふのである。

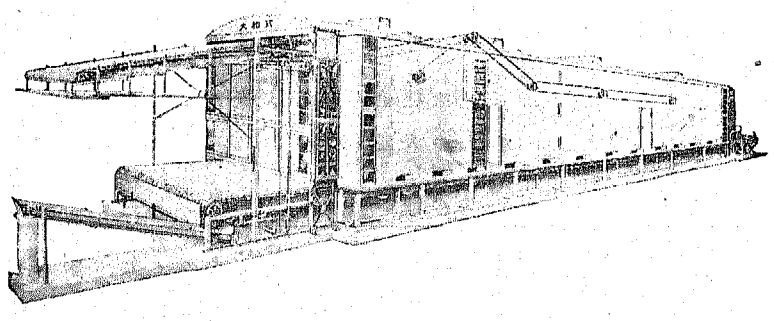
吾々四人の血潮は男を想ふ女性の心情に泣かされ動かされそして奮ひ立つた。

『運命を共にしてやるんだ』

假令笠岳に七ッの命を捨て樣とも此の人々を見捨てる事は出來ない。

『身を挺して事に當れ』

と日頃よく訓へられる校長閣下、の温顏と言葉がふつと腦裡をかすめ去つた。我々は雪穴を掘つた。しびれ切つて全く自由も利かない手で一尺、二尺そして三尺遂ひに人間數名を入れるに充分なる大き

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機
二五九八年代表型
【各種型錄贈呈】

營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥裝置
特許やまとホイロ
特許サンコー式濾過淨水裝置
特許サンコー式廢湯吸熱器
特許サンコー式高壓ポンプ
特許サンコー式トラップ
製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

な穴倉を作つてしまつたのである。

『籠城』……　何時止むとも豫想だに付かない此の吹雪の中に籠城の覺悟を決めた。

四、救援隊出動

本班と袂を別つた內海、阿形、宮田（弟）の三名は殘つた同胞の生命が自己の双肩に懸るを思へば寒さも飢も疲れも忘れ、起きつ轉びつひたすらに山を下つて行つたのである。

やがて涙の勞は酬ひられ遂に『熊の湯』に達し明確に事件を通告し續いて三人は直ちに居合せた法政大學の學生を以つて第一救援隊を組織し、勇往邁進再び友の居る遭難現場へと取つて返したのである。

五、第二班熊の湯へ下る

一方遭難現場では我々四人の他に未だ遭難者の身を按じて踏み止まつて居た純情な一人の女性と、未だいくらか歩く氣力の殘つてゐる遭難者中の青年とを宮田兄が連れて內海君の後を追ふ事にした。吹雪はます〳〵募る、最早全く夕闇がたれこめて指導標も見えない。

何處迄も〳〵幾千丈の深い澤が續いて居る。

『熊の湯よ何處』

『救援隊よ何處』

『穴倉に止まつた友の命は？』

『おーい』　山のSOSが幾ら發せられても消えるが如く吹雪の中に吸はれて仕舞ふ。どうしやうもない不安な焦燥に驅られる。手足に凍傷が來るらしい。ともすれば体の自由も失はれ勝だ。

しかし運命の神は最後迄吾々の頭上に微笑んで呉れた。內海を先頭とする救援隊に出會つたのだ。出發當時から風邪氣味で熱さへあつた內海が元氣一ぱいの姿を我々の前に現はして呉れたのだ。

『あゝ熊の湯近し』　其の嬉しさ、自己の任務の遂行と頂かつた二人の生命を全ふし得た其の感激。此のまゝもう十分もしたら或ひは自分達も運れて來た二人と共に永遠に歸へらぬ人間となつてしまつて居たかも知れない。

六、本班籠城を思ひ切り山を下る

一度は悲壯なる籠城の覺悟を決めたものゝ肝甚の遭難女性の氣力は既に衰へピスケットを口に入れてやつても嚙まうともしない。只うは言の樣に男の名を呼び己れよりも男の安否を氣遣つて居るのだ。

そして一寸でも氣を許して居ると直ぐ眠つて仕舞ふ。眠らしたら大變だ。其の度に平手で女の美しい横顔を右、左と力一ぱいなぐらねばならぬ。睡る、なぐる。睡る。なぐる。かうした慘酷な動作を何度か繰返して居る中に我々自身の手足にも燒付く樣な激痛を感じて來る。

女の生命も寸刻を爭ふ危險狀態に陥つて居る。此の世の人とも思はれない冷え切つた体を三人で交替に暖めて居ても零下何十度の寒風が遠慮會釋もなく吹きまくる。

今迄急援隊を鶴首して居た我々は此の卑屈な依頼心をかなぐり捨て折角の雪穴を後に二人の肩で女を支え一人は雪をかためつゝ吹雪に猛る雪山に熊の湯目指してき迷ひ出たのである。

ともすれば人事不省に陥らんとする女を勵ましながらも、もう既に我々自身の体力もさう續きさうもない。只根强い許りの精神力がわづかに我々の体を動かして居るのに過ぎないのだ。小柄とは言へ十二貫からの女の身を支えて居る二人の肩は先刻からもぎれ相に痛む。

石に嚙り付いても如何に力んでも人間の体力には限りがある。一刻々々死の手が慘酷にも我々の前に差し延べられて行くのだ。

かうして一粁も下つたらう。突如『やーほー』と、懐しい我が山岳部の合言葉『やーほー』『やーほー』とお互ひに薄闇の中に呼び合ひながら……。

救援隊が來たのだ…もう大丈夫だ…大きな感激が五体をかけすり廻り、わづかに殘つて居た体の隅々のエネルギーが此の足二本に單められて、生還の喜びに打震へるのだつた。

七、大澤氏遂に絶望……

是より內海等の救援隊は更に現場迄登り、死後數時間を經過せる男性遭難者（大澤氏）を鹿澤の例もあるので……（鹿澤にて今冬遭難者あり、死後四時間を經て尙蘇生するを得たり）手早く毛布に包み全速力で、此れを例のスキー橇に付け熊の湯迄運んだのである。運ばれた大澤氏に對しては我々と法政大學の人々とで直ちに雪によるマッサージ及び人工呼吸を初めた。

手、足に八人、人工呼吸を施す者一人都合九人が大澤氏に取り付き、冷い雪をつけてはこすり、こすつては付けるのだ。『生かし度い。何んとかして』と一同の身を忘れての涙ぐましい努力が續けられて行く。

九時も先刻打つた。十時も過ぎた。たが未だ凍死体は蘇生して呉れない。もう手足の毛は無論、皮膚迄が摩擦ですり切れて赤黑い血がにじみ出て居る。火の氣のない乾燥室には愈々寒氣が迫る。

只生命に代えても只管大澤氏の生のみ思ふ熱情に燃ゆる若人の白い息が緊迫した夜の空氣の中を流れて居る。

もう同宿の人々は皆寢に就いたのであらう。山の溫泉小屋は森閑として物音一つしない。時々雪を交へた嵐が窓をすざまじく衝く音が妙に氣にかゝる。

恐らくは大澤氏にしても今宵一夜の安眠を吾々と同じく此の山小屋に求め樣として來たであらうに……何んたる運命の皮肉か。人々は心行く迄鑛泉に浸り暖い夜具にまどろみつゝあるに彼一人のみ斯く乾燥室の片隅に取殘され生死の境を歩まむとは……。

十二時、一時容赦なく時は進む。長い間彼の脈を見たり胸に耳を當てたりして居た醫者（東京醫專出なりと云ふ。折好く熊の湯に泊り合せたり）が遂に身を離し。

『手を引いて下さい』

と醫者らしい冷靜さを以つて宣言した。宿についてからも綿の如く疲れ果てた身に鞭打ちつゝ彼の看護に當る事實に數時間どれ丈け彼の蘇生を期待し神々に祈つた事か。あきらめ切れない口惜しさ胸が一ぱいにつまり、みんな熱い涙にむせんで仕舞ふのであつた。

其の夜は偶然にも吹雪をついて熊の湯へ來られた鐵專の先輩都丸晴治氏と同室し、遭難の話や看護介抱やらで興奮の中にも皆寢床に入つたが一晩中夢と勞れにうなされどうにも寢付かれなかつた。

明くれば五日朝、哀れな山の犧牲者、大澤氏に對して深く哀悼の意を表し一同を代表して小口君に燒香して貰ひ、後事は熊の湯主人に託し恨み深き熊の湯を後に出發した。

吹雪は依然として止まぬが熊の湯から上林溫泉迄は實に理想的な十二粁の滑降路だ。途中たじろいで居る幾組かのパーテーを追ひ越し一氣に丸池、沓打、坊平を踏破、湯の香漂ふ溫溫泉に旅裝を解き得たのは實に十一時半。

疲れ切つた体を湯舟に浮べそゞろ昨日の出來事の追想に更けるのであつた。

八、結　び

七人が七人とも微傷だに負はぬのみならず事無く人命救助の大任を果し得た事は今更一場の夢の如く思はれてならない。

我々は今の今迄自己の体力と氣力に自信を持ち得なかつた。だが然しあれ丈けの難コースを踏破し、十時間餘の吹雪と闘つて人生を救助し得た此の事實は我々の体の中に働いた体力以上の何物かゞ潜んでゐた事を思はされる。

これこそ十數日間菅平高原で鍛えられた大自然の訓育が吾々の骨身に迄泌み込んで大きな人間的自然力となつて我々の体內に培はれて居たのではなからうか。

而かも尙此の自然力があの大彈壓下にあつて其の威力を發揮し超人的行爲となつて現れたのかもしれない。

威大なるかな自然力、大自然は我々にかく教える。

『自然は偉大なる試錬を人類に與へ、自然はかくして人類を育くむ』と。

兎に角吾々の一人々々の力ではなかつた。

去る一月十二日始業式に校長閣下から言はゞ怪我の功名とも言ふべき今回の事件に對し御賞めの御言葉を戴き又表彰狀賞品を授與され誠に身に餘る光榮である之れ偏に校長先生の平常の御訓陶の然らしむる所又我々部員の爲めに常に勞を惜まれない山口山岳部長並に特別委員宮坂先生の御指導の賜と心から感謝する次第である。

（二月五日記）

本校學生の美擧
スキー遭難者の救助

正月四日の出來事である。本校山岳部員學生阿形一三、小口宗久、內海浩、宮田修、目崎武美、宮田皓、北村元三郎の七君――何れも山とスキーの猛者連――が菅平―須坂―山田溫泉―笠岳越へで熊の湯―草津へのツアーを計畫した。菅平を發ち一日四〇キロの長距離コースの最後志賀高原笠岳（二〇七五米）山頂近くの難コースに入つた頃、既に午前からのかスと吹雪は益々猛威をふるひ出して來た。一行の中誰も遭難しなければ良いがと念じつゝ進む行方に、不圖一群の人々がしきりに狼狽してゐる。見れば三人の遭難者を圍んでゐるのだつた。がそれは遭難者救助にはなつてゐないので、周到な注意、豫備的知識をもち合せてゐた諸君は實に全く己れの危險を忘却したものゝ如くに救出の手配、救援隊呼出しの爲に凡ゆる技術をもつて働いた。三人中一人は既にプルスがなくなつてゐたが他の二人――一人は青年一人は女性、何れも二十歳位――は遂に救はれた。七人の諸君は人々をも指揮し救出運搬をなし灯し頃熊の湯迄雪深い中を辿りついた。その夜は哀れな人々の爲に徹宵交々看護に盡したが一人は蘇生できなかつた。之等の模樣は學生諸君の口からと共に熊の湯の主人からの手紙、又遇然に同宿された先輩群馬縣廳の都丸晴治氏よりの御通信によつて更に明かとなつた。二十歳前後の若い諸君がよくも天晴れの手柄を立てゝくれたと賞讃感激せざるを得ない。校長先生も一月十二日始業式の日先づその行を賞され更に次の樣な表彰狀と賞品とを授與せられた。

賞狀

學生名

右ハ昭和十三年一月四日本校山岳部員六名ト共ニスキー山岳旅行中志賀高原笠岳山頂附近ニ於テ吹雪ノ爲遭難瀕死ノ三名ニ遭遇スルヤ身ノ危險ヲモ顧ミズ直チニ之ガ救出ニ勵ヒ遂ニ中二名ノ救助ニ成功シ之ヲ熊ノ湯ノ宿舍ニ運ビ到ツテ徹宵ソノ看護ニ竭セリ。之レ因ヨリ側隱自然ノ發端ニシテ純眞ナル同胞愛ノ發露ナリト雖モソノ用意ノ周到ニシテ動作ノ沈着ナルソノ責任感ノ旺盛ニシテ統制力ノ拔群ナル苟ニ之レ平素ノ修錬ノ結實ニシテ又以テ本校學生ノ範トスルニ足ルベシ。仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十三年一月十二日

上田蠶絲專門學校長　針塚長太郎

賞品

針塚校長先生揮毫書軸　一幅

之は當に山岳部員個人の榮譽であるばかりではなく實に學生の名譽であり又以つて本校の誇りとすべき事であらう。尙學生諸君は盡すべきを盡したので後事を『熊の湯』に託し警官の檢死を待たずして歸路についた。その爲か、或は正確な現狀目擊者のなかつた爲か何れにしても所轄警察（中野）署も判然とその顚末を摑むでゐなかつたのであらう。上田署で後に問合はせてもらつたが事件はそのまゝで落着したといふ。當然人命救助事件として表彰さるべきものが何等の音沙汰もないのは遺憾である。救助の模樣その他後日の參考とすべきことも多いので詳細は學生諸君により本紙へ記載した。

最後に筆者は冬山の犧牲となつた哀れな青年の冥福を祈り又幸ひに死線を脫し得た青年及女性の爲に健康を祈る。

（山岳部　山口定次郎）

熊の湯附近に於けるスキー遭難者救出に際し母校山岳部員の活躍を語るの記

都丸晴治

前言

澁峠越は數年來の宿望であつたので研究準備は略出來て居つた。同志三名を得たので本年こそ實行する考へで正月二日に前橋を出た。豫定コースは二日に草津温泉に泊り三日に澁峠を越へて志賀高原に出で澁温泉を經て上田に來り菅平、新鹿澤等で滑つて五、六日頃歸橋する。若し志賀の天氣が良ければ發哺温泉に一泊してもよいと思つて居つた。天氣が良ければ樂なコースであるが一月は好天は望めない。吹雪がある事は始めから覺悟である。案内人さへ承知すれば天候の如何に拘らず決行する考へであつた。

處が澁川町で省營バスに乘ると車掌君が白根山が三十日頃から噴煙甚しく附近一帶降灰でスキーは駄目だから草津行は中止した方がいゝと云ふし同行すべき一人が元旦の屠蘇が効きすぎてか來ないので二人きりでは多少の淋しさもあつたので止むを得ず急に豫定を變更して新鹿澤へ行く事にした。でも斷念致しかねて同行のT氏に草津へ廻つて實否を確めて來て貰ふ事にし僕はT氏を草津迄案内すべく同行して來たT氏の課長と小供達五人を新鹿澤へ案内して先行した。

夕刻T氏の友人であり僕等のクラブ員である女學校の教師をして居る二女性がやつて來た。次でT氏も來た。そして白根山の降灰は實に甚しいが晝頃から降り出した雪で大分覆れ且つ芳が平から上は灰が無いし案内人も得られるとの報告なので喜んで同夜は新鹿澤に泊り翌三日の午後同地で滑り夕刻草津へ着いて泊つた。

一行四人女性二人も相當なスキーヤーではあるが大事を取つて僕は案内人を二人雇ふ事を強調して手順を整へた。夜半から風があつて戸や障子をガタ〳〵させて居つたが四日の朝は東の方は晴で太陽が美しく昇つて來た。午前八時に宿を出た。案内人は一人しか來ない。他の一人は前夜酒を呑み過ぎたとの事である。斯くなつては來ても來なくてもいゝと思つたが後から追ひ付かせると宿の主人が言ふので女性のリユツクサツクを置いて出た。それは失策であつた。到頭來たいので最後迄少なからず不便を感じた。

町の北端にある草津神社に參拜して無事を祈りそこでスキーを履いた。案内人—T氏—女性二人—僕の順序を定めて横手山の頂上迄之の隊形を亂さぬ事にして登り始めた。半町もゆかぬのに猛烈な吹雪となつて前の者が時々見へなくなる。

午前十一時芳が平ヒユツテに着いた。ヒユツテの番人と殆んど同時に着いたので一緒になつてストーブを焚き付けカチ〳〵に凍つてゐる大釜の『シルコ』を溫め始めた。間もなく草津の連中らしいスキーヤーが十數人這入つて來たので小屋は滿員になつた。そこへ万座温泉へ行く途中で六人遭難者があると知らせる者が來た。三日から迷ひ始めたので穴を掘つて避難して居るとの事だが其の場所は不明瞭との事だ。でも草津の連中を主にして早速十數人の捜索隊を編成した。僕等はスキーには自信がない。女性は居る。山は越へねばならぬので手傳へぬから捜索隊員にシルコを給仕し持參される餅燒を手傳つてそれ等の人が出掛てから出發したので豫定より二時間以上遲くなつた。

横手山ヒユツテに午後一時頃着いた。志賀から越へて來た者が四、五人居つたのみである。鹽の眞白に噴いた鮮の一片と凍つた生卵二個で雜食をして午後二時に出發した。豫定より三時間遲れてゐるが相變らず猛吹雪なので急いでも仕方がない。一人の女性は幾分不安になつて來たか此處に泊るか戻るかしたいと言つたが元氣付けて出た。出掛けると二人連の若い男が不安だから是非一緒に連れて行つて貰いたいと申出た。一人は岩波書店員で二度越へた事があるが一人は帝大工科の學生で始めてだと云ふ。そこで僕の後に付かせた。一行七人になつた。芳が平迄は多勢登つて來たが横手から登る者は吾々七人以外にはなくなつてしまつた。

横手山の頂上は特に猛烈な吹雪で周圍の樣子が少しも判らぬので暫らく立往生した。降り始めた處で又一寸道に迷つたので立往生して吹雪の合ひ間を待つた。でもすぐ上に道標を見付け次で伐採木を見付ける事が出來た。雪が深いのでスキーは却々滑らぬ。

ノヅキヒユツテの少し手前でヤホー〳〵と呼ぶ聲がするので近寄つて行くと下から二人登つて來た。よく山になれた志賀附近の者らしい。聞いて見ると二人連の者が草津へ越すとて出掛けたが吹雪で迷ひ其の一人が戻つて來て救ひを求めたので他の一人を捜索に來たのだといふ。然しすでに午後三時近くなつて居る事とお互の危險も迫つて來るので如何する事も出來ない。其二人もそこから引返して行つてしまつた。ノヅキヒユツテを午後三時半に出て午後四時十分に熊の湯へ着いた。熊の湯が見えたので一氣に宿の入口迄滑つて行くとハツト思つた瞬間自ら轉んだ。左足の處に直徑六尺深さ一丈位の穴があつて底を水が流れて居るのだ。すぐ後からT氏が滑つて來たので知らせる間がないので僕のストックに引掛けた。T氏もさる者でスキーの三分の一位先を其穴に乘りかけたが轉んで止り落ちなかつた。T氏は僕よりスキーは上手なんだが吹雪でよく見へぬし雪が深いので如何する事も出來ないのだ。僕の轉んだ方が位置がよかつたのですぐ起きられたがT氏は起き樣とすると穴へ落ちるので僕が後に廻つてストックを握らせて引張り起した。二人はホツとした。最後の處で醜態を演じて笑はれる處だつた。僕は辨當包をロツプで腰にしばり付けて居たが此のロツプを使用しなくも濟んでよかつたと二人は哄笑した。

無事に熊の湯へ着いたので約束よりチツプをはずんで案内人を歸す事にした。二人の若者も無事に着けた事を非常に喜んで僕等の案内人にチツプをやつてもいゝかと申出たので直ぐ同意した。案内人も喜んで丁寧に頭を下げて別れた。案内人はスキーは上手の部ではなかつたが四十歳位を過ぎて居り山にはよくなれて頑丈者で然も非常に大事を取つてゆつくりやつてくれたので山には全く無經驗の二人の女を連れて居つても少して不安が無く餘裕を持つて約五里八時間終始向ひ風の猛吹雪をついて無事宿望を達し得た。其の間鼻の穴と目は絶へず凍り付いてしまふので手でつまんだりおさへたりして凍るのを溶して來た。T氏は丸池迄降ると言ひ出したが里程は一里强しかなくもこの吹雪では一時間半位要すると見ねばならぬ。夜に入つて暗くなる。それに二人の女は相當疲勞して居るので兎に角少し休んで決定する事にして宿の乾燥室に這入つた。

母校山岳部員の偉大なる活躍

熊の湯はすきになつたろうとの事であつたが前日からの吹雪で逃げ込みスキー置場は一杯で置く處が無い位だ。乾燥室の薄暗い室はストーブを圍んで滿員だ。帳場の處も滿員だ。それに今遭難報知があつたとかで外は救援隊が出發する處だ。

吾々は未だ泊ると決定したのでないから乾燥室で暫らく立つて居た。そこへ若い學生らしい一人が顏面凍傷になつた樣に眞赤な壯烈な顏をして這入つて來て遭難に關する何事かを獨言の樣に話して又出て行つた。暗いのではつきり顏を覺へて置かなかつたがその人は報知に先行した内海皓君であつたと思ふ。遭難者は男二人に女一人だそうだ。一時間程過ぎると遭難者の一人だと言ふ若い男が伴はれて來て土間に寢ころんだ。數人の者が來て藥を飲めとか大丈夫だとか言ひながら室の方へ連れて行つた。暗い處で多勢がや〳〵して居るので近寄る事も出來なかつたが手足や顏が凍傷になつた丈でたいした事はないとの事だ。女の方は其の内に來たそうだが帳場の方から室に連込んだので乾燥室に居つた吾々にはよく樣子が知れなかつた。

こんな事で思はず時間を過してしまつたので我々も泊る事にした。客は超滿員で帳場へ交渉してもなか〳〵進行してくれない。止むを得なければ雪の中に寢るよりいゝと思つて待つて居つた。そこへ學生らしい一人が來て上田蠶專の者は居ないかと聲を掛けたので始めて母校の者が來て居る事を知つた。その人は阿形君だつたと思ふ。早速其の人に宿無しの事情を話し無理だろうが二人丈けでもいゝから泊めてくれる樣相談方をたのんだら二人位ならいゝたろうとの話だつたので後で訪ねる事にして室の番號丈聞いて置いた。

午後六時頃になつたら番頭が來て遭難者を連れて來るから乾燥室をあけてくれと云ふので止むなく上つて帳場の所へ行つて見た。そこの板の間には今しがた連れて來たばかりの男の遭難者を寢かして數人の者が一生懸命雪でこすつたり人工呼吸を施したりして居る。勿論呼吸はしてゐない。その廻りに二、三十人丹前を着た若者が立つて見て居る。吾々は方法がないから食堂へ這入つた。室も定まらぬ宿帳なぞ勿論つけて居ないが六時半を過ぎたので先づ夕食を喰ふ事にした。

そこで横手山から同行した工科の學生が知人を見付けたので話した處三人迄いゝとの事で東京の二人とT氏とが其の室に入る事にした。夕食がすんでから僕は宿中の各室を全部開けて見て廻つたがどの室も滿員だ。最後に蠶專の學生の室へ行つて見たら八疊の室に三人居つた蠶專の學生は七人だそうだが一人も居ないので番頭君に一人でいゝから呼んで來てくれと話したら間もなく體軀堂々たる人が來て肥つた體を窮屈そうにきちんと座つて宮田ですと丁寧に挨拶するので却つて僕の方が恐縮してしまつた。そこで三人泊めてくれるかと話すと心よく承知してくれたので二人の女もすつかり安心した。T氏も來てしまつた。

その内に順次室に來て皆きちんと座つて一人々々丁寧に姓を言つて挨拶してくれた。見れば最初乾燥室で遭難者の話しをした人や帳場の處で熱心に看護して居つた面々である。皆山から來た時の服裝だ。僕は非常に喜しかつた。山や海の混雜した宿でこんな丁寧な禮儀正しい學生に逢つた事がない。特に近年山の宿や汽車電車の中で他人の迷惑を顧みぬ不作法な學生に多く出逢ふので學生といふ者に對する一種の憎惡を感じて居つた處なのでこんな禮儀正しい謙讓な學生も居るかなあと瞬間自己の偏見を恥じる氣持が出た。然もそれ等の學生が皆母校の學生なんだから尚更喜しくなつてしまつた。

僕は先刻帳場の處で見た活動振り等を思つて感激のあまり是非姓名を覺へて置きたくなつたのでノートを出してサインを求めたら絲三宮田修、絲三小口宗久、絲三内海弘、蠶二目崎武美、蠶三阿形一三、絲二宮田皓、蠶一北村元三郎と記入してくれた。その間にも交互に看護に行つて居る。

一行は同日菅平から一氣に須坂迄滑降してそれから山田温泉迄バスに乘り山田から又スキーで登り笠岳を越へて降つて來ると熊の湯より十數町手前の處で午後三時半頃前記の遭難者に逢つた。そこには先に來た數名の者が見付けて居つたが其の人達は經驗が無いので女の方を眠らせない樣にコツキ廻して居る丈だつたので母校の學生がそれを引受けるから早く熊の湯へ知せて救援隊をよこしてくれと話したので先の者は母校の學生の言にまかせて降つてしまつた。處が幾ら待つても救援隊は來ないグズ〳〵して居られぬと云ふて手不足でどうにもならぬので決心して二手に分れ比較的強い三人が殘つて遭難者を護り他の四人は救援隊を募るべく熊の湯へ先行した。殘つた三人は非常の決心であつたと思ふ。即ち場合によつては遭難者と雪の中で夜を明し生死を共にせねばならぬかも知れぬのである。全力を擧げて速に避難せしむべき穴を雪中深く掘つたそうだ。

先行した四人が熊の湯に着いて其の急を報知したので宿の者も始めて遭難の狀態場所等が知れたので早速救援隊を組織して母校學生と共に出發したのである。救援隊出發直後僕が宿泊の交渉に帳場へ行つた時宿の者の言ふには先に遭難者があると云つて來た者があつたが要領を得なかつた。暫くして又遭難者があると知らせて來た者があつたが之も要領を得ぬので救援に行けなかつた。が先刻來た學生によつて始めて要領を得たので早速救援隊を組織して母校學生と共に出發したのである。即ち其の三度目に來て正確なる報知をした者が母校の先行した學生であつたのである。凡そ斯る場合の通報は一刻を爭ひ且つ正確さが重要であるがお互が危險にさらされて居り冷靜をかいて居る時であるから要領を得た通報をする事は却々困難である。午前労が平で開いた遭難通報も要領を得て居なかつた。斯る場合に於て平素の鍛練の効果と剛毅沈着が發揮されるのである。午後六時頃遭難者が凍結した死の狀態で宿に搬入された。それから帳場の前の寒い板の間に置かれて十數人の者が眞劍に介抱して居る。其の周圍に懷手をした學生や同宿者が野次馬の樣に多數集つてガヤ〳〵して居るがそれ等の者は介抱者の邪魔にこそなれ自ら手傳ふとする者はない。

母校の學生と宿の者丈けが中心になつて肉身も及ばぬ程の眞劍さで介抱して居るのだ。母校の學生も其の日は隨分强行程を取つて居るのだから相當疲勞して居る筈であるが自己の疲勞も忘れた樣に零下十五度位の寒い板の間で雪でこすつてゐるのだから敬服せざるを得ない。手が眞赤に腫れ上つて堪へられなくなると室へ來て少し暖めては又介抱に專念する。目崎君の如きは室に居る間もどうか生きてくれる樣にと涙を流さん許りにして手を合せて祈つて居る。僕は其の學生らしい純情さを見て全く感激してしまつた。

午後九時半頃になつて『幾分呼動があるそうだ』とか『左手の指が軟くなつて來た』とか一同稍愁眉を開きかけたので第二段の手當として幾分暖かい乾燥室へ移した。當日新鹿澤で遭難した者を四時間程介抱したら蘇生したと云ふので到頭十二時迄介抱する事にした。處が同宿者は三、四百人も居り其の中には學生や元氣の若者が多數居つたのであるが彼等は尻込みして介抱する意志がない。全く母校の學生丈が眞劍に介抱して居る。然し手が足りないので各室を廻つて有志を狩り集めてはやつてゐた。

斯る熱心な涙ぐましい介抱も遂に甲斐無く蘇生しなかつた事は返すゝがへすも殘念であつた。學生諸君の落膽は如何ばかりかと想像される。特に先の報知が要領を得て居つたなら或は救ひ得たかも知れぬと思ふと其の點甚だ遺憾である。然し他の男女二人を救ひ得た事及死體を犧牲無しに搬入し得た事は全く母校の學生諸君が身を屠しての活動の賜ものである。敬服感激の他はない。全く激賞してあまりあると思ふ。

遭難者は住所氏名が譯らなかつた。救はれた女と男は吾々の隣の室に安靜にして置いた。女の者が住所氏名丈を言ふのを好まぬらしいし一緒に死なしてくれなぞと云ふので成るべく興奮させぬ樣に大事を取つたので遂に何者とも聖朝迄知れなかつたのである。又早く身元が解つたとしても山の奥地の猛吹雪の夜では如何とも方法がないのである。

以上を要約すれば即ち

一、遭難の報知が正確であつたので時を移さず救出手配が出來た。

二、遭難者發見後の手配が敏捷で要領を得て居つた。

三、遭難者中二人の生命を救出し得た

四、自己の危險を犯して人類愛の爲に眞劍なる活動をした。

五、部員の團結强固にしてよく統制が保持されて居つた。

六、質實剛健謙讓にして禮儀正しき美風が遺憾無く發揮されて居つた。

等が特筆出來る。

尚付け加へて置きたい事は斯る場合斯る場所に於ては若き學生として稍もすれば禮を失する言動があり勝であるにも拘らず始めて逢つた僕に同窓だと云ふ丈で實に禮讓なる態度で應對してくれた事である。之は平素の修養及教育が實を結んで自ら表現されたものであつて校風の美しさを謳歌する氣持を禁じ得ない。

感激に滿ちて僕等の義務の一端とも思ひ如上の事情を校長閣下に拜眉の上詳細報告した次第である。

河豚の話

藤非生

私は少年時代に河口へ釣に行つたことがある。そのとき釣り上げた得體の知れない魚を、船の胴の間に叩きつけては喜んだものである。それが今日お話する河豚であつたことを想ひ出して居る。

河豚は海に棲息してゐるのに河豚と書くのは不思議である。語源を探究して見たいと思ふ。兎も角河豚の肉は古來美味とされてゐるが、その體内に藏する猛毒のため人命を損んずることが多く、且つその中毒症狀は誠に早く表はれるそうである。それで一名鐵砲と仇名されてゐる。蓋しよくあたるの語義である。

嘗て大阪府ではその中毒を怖れて河豚の移入を禁じたことがある。それ程危險視されたものである。現在でも關東、東北及び中部地方の人達は河豚は中毒するものと思つて居るらしい。恐らく吾か千曲會員中でも、河豚の味を知つてゐるものは極く寥々たるものであろうと思ふ。かく言ふ自分も、それを喰べたのは昨年の春が初めてだつた。

母校の蒲生教授が宇和島市へ講師として來臨されたのを機會に、その近傍に住む千曲會員が會合した席上河豚通の上田岩男君の發起で、河豚の刺身がとりよせられた。蒲生教授は衛生に注意されて居られるので恐らくは喰べられまいから河豚であることを秘して、同氏を驚かせようとの興味もあつた。が同氏は見るとすぐ「あゝ河豚か。河豚は大分で喰べたよ」と一言のもとに期待は外された。

楕圓形の白い皿に盛つた河豚の刺身はセロハンの樣に瀏い。それが綺麗に扁形に並べてある。中央には尾鰭が立てかけられ反對側にはトウトウミ、ミカワ、オサ、肝などが配色よくならべてある。醋醤油を入れた蓮花にきざんだ葱と肝を入れて掻き廻はし、それを下地として刺身を喰べるのである。なる程美味い、もう中毒の恐ろしい事も忘れて貪り喰べた。大皿の肉が殆んと平らげられた頃に、時計を手に沈默してゐたH氏が、よし俺れも喰べると言ひながら怖々箸を下ろし始めた。けだし河豚の中毒は三十分以内に表はれるから三十分前に喰べた人が何んでもなければ大丈夫な譯であるからである。元來河豚の皮は生が美味である。就中オサが一等だと思ふ。チリ鍋には俗にウグイスと言ふ口唇が美味とされてゐる。

河豚には捨てる處がない。腹子でさへ喰べる。はら子は他の魚に比類を見ない美味だと言ふが、未だ口にしたことがないので殘念に思つてゐる。河豚の中毒性があるのはその卵巣である。その卵巣に、テトロド、トキシンと言ふ毒素があつて之れを喰べれば大丈夫一命はない。だが慣れた料理人によつてつくられた河豚料理は絶對安全である。安全でなければ警察の保安行政が默視する筈がない。

同じ河豚でも產地と大きさによつて味に格段の差がある。自分の知つてゐる範圍内では四五百匁見當の約一尺四五寸位のものが一番うまい樣である。それより小さいのは駄目だ。大きくて三尺三寸位のものは絶對危險である。一命取るだから、は戯談だ。

河豚料理には刺身、チリ鍋、雜炊がある。河豚の鰭酒も亦乙なものである。

生きの好いものなら刺身に限る。チリ鍋もこんな寒い夜でも一鍋喰べ終る頃には身内中ポカ〳〵して來る。神經痛や齒痛は忘れて仕舞ふ。やつぱり幾分毒素が含んでゐるためらしい。毒を制して藥とする類だ。食通になると段々横着になつて、味を慾求する餘り、水洗ひを簡畧にする。そんなとき中毒騒ぎが起るらしい。まあ阿片に中毒して喜ぶ支那人も餘り笑れない話である。

上田便り

戰死三氏の市葬　腑支聖戰の華と散り東洋平和の安定の礎となつた上田市の三戰死勇士歩兵上等兵掛川百平、砲兵上等兵土屋三郎、歩兵上等兵砥石新次郎の三氏の市葬は冬空冷く垂れこめた十二月廿一日午後一時半から太郎山麓北校庭で厳かに執行され參會者は五千名に達し三時十五分終了した。

諏訪部區劃整理着工　上田市諏訪部の區劃整理事業は縣の認可も得たので十二月廿三日午前十一時地鎮祭を執行したが整理面積六万坪工費二千五百圓である。尚上田市で區劃整理の行はれた所は柳原御所、豊原の三區である。

市營「報恩寮」地鎮祭　上田市の社會施設報恩寮は北校西方大字上田思川地籍元屠場跡に建設地を選定、十二月二十日工事入札を行ひ、二十四日地鎮祭を執行した。該寮はよるべ無き不具癈疾者精神耗弱者老衰者定員二十名を收容するもので敷地四百四十一坪、工費約七千圓設備費約千圓を要し四分の三の國縣補助があり、尚年々の維持費に對しても四分の三の國縣補助がある。明春三月竣工の見込である。此の市營報恩寮は諏訪形に建設される方面事業助成會經營の隣保舘及淨念寺内の母子ホームと共に縣下に誇る社會施設となるであらう。

菅平バス休止　上田温電バス路線中上田菅平口間の乘合自動車は十二月廿五日から當分の間休止する。

菅平來場者減少せず　菅平スキー場滞在者一月五日現在ホテル男二百七名女廿七名、山の家男百九名女四名、其他男二千名女七十名、合計男二千三百六十名女百一名で昨年總計一千三百名に比し遙かに多く之は一般民家利用者の増加した事とスキーが一層大衆化した事を示すもので時局の憂色も完全に吹き飛んだ。又昨冬十二月十五日以來の菅平スキー場宿泊人員累計は一月八日現在男一万八千二百九十三名女一千二百三名、合計一万九千四百九十六名に達し昨年同日累計一万九千六百六十七名に比し二百餘名を減少したのみで時局柄激減を思はせたのが「銃後の體位向上はスキーへ」の宣傳が利いてか殆んど減少を見せなかつた。

信越のスキーヤー却つて増加　長野運輸事務所調査に依る越年せる信越各スキー場のスキー客は左の如くで減少豫想が却つて増加した。之は漸く世人が信越方面のスキー場の價値を認識し又戰時體制下の體位向上はスキーに限るとの關係業者の宣傳が奏効したと見られてゐる。

△菅平二千人△志賀高原三千六百人△妙高千二百人△野澤千五百人△關、燕六百五十人△赤倉七百人△池の平五百人。

スキー場乘車賃割引　長野運輸事務所では一月四日より三月末日迄の左のスキー場行乘車賃二割引とする。

妙高、野澤、志賀高原、笠岳越、濁峠越、菅平、乘鞍麓、白馬山麓、中山、御嶽、藪原

柴崎市助役辭職す　上田市助役柴崎新一氏は一月十三日成澤市長に對し老齢任に堪へずとの理由を以て辭職願を提出した。然して助役の辭職は一ケ月前に申出る規程なので正式辭職は二月十二日となる譯である。同氏は昭和三年助役就任勝俣、成澤兩市長に仕へ三期十年勤續しその功勞實に大なるものがある。

上田市の酷寒　上田市の本年の寒氣は例年に見ざる激しきものであるが一月十四日早朝は上田蠶試支場調査に依ると最低氣温零下十三度五分を示し今冬最初の酷寒で市水道の凍結破裂事故三十件に及んだ。

市收入役廣瀬署長に決定　兼に辭職せる收入役丸山平八郎氏の後任は人選難に陥入り糧々波瀾を見せたが十二月二十日市會協議會に於て上田警察署長廣瀬淳氏を推薦し同氏は一月十七日就任を受諾した。

大村知事再任　厚生省の新設に伴ひ地方長官の更迭行はれ本縣知事近藤駿介氏は石川縣に轉じ後任として内務省社會局長官大村清一氏が任ぜられた。大村氏の本縣知事は二度の勤めで一昨年三月地方局長に榮轉した際縣民齊しく名知事を失ふ失望の聲を放つたのに對し同氏自身今後地方へ出る場合は必ず再び信州に歸り度いと洩した事ありそれが今回實現したもので縣民は今更乍ら「名知事歸る」と喜びに包まれてゐる。

染織試驗場擴張　上田市常磐城長野縣染織試驗場では約二万圓を投じて撚絲工場を新設する事になり地元負擔等に付き佐藤場長は一月廿五日成澤市長を訪問打合せを行ふ處があつたが同工場は北信地方織物業者の共同利用にも供する筈で設置する機械は撚絲機が主體で台數は未定であるが海軍々需品材料を撚絲し軍需品工業を地方へ誘致すると共に最近試驗場が中心となり中央進出商品化を計つてゐるホームスパンの理想的撚絲も工場の一部を利用して行ふもので作業場面積は四間に八間位の豫定である。

上田警察署長更迭　上田市收入役就任の爲め退職せる上田警察署長廣瀬淳氏の後任は一月廿九日附を以て飯田署長警視矢島義樹氏と決定した。

產繭處理は特約と組製とが激増　縣蠶絲課產繭處理統制法實施第一年十二年度中の處理狀況を調査中の處集計なり一月廿五日發表したがそれに依ると處理繭七五二万二六二七貫中

乾繭實數一四〇九八貫、特約二〇六四七九七貫、組合製絲一六七七〇二貫、委託三七〇四七貫、繭市場生繭一八八三五五一貫、生繭六七九五七二貫、其他一六四二五六貫

で前年比增は特約組合の九一三九三七貫組合製絲の一七五七五貫、委託一二九六七七貫、減少したものは乾繭四二一九貫生繭市場三五五〇九三貫、生繭其他四七七五六貫、其他三三五九貫となり特約組合、組合製絲の進出目覺しいのに對し生繭市場等の減少は注目されてゐる。

上田人口動態　上田市の昨十二年度中に於ける人口自然增加は三百八十名で一日一人、千人に付き十七人宛增へた勘定である。尚同年中の人口動態は結婚五一九組（前年比七三增）離婚二九（二增）出生八九四（二四增）死亡五一四（五減）死產五〇〇であつた。

釜數整理六万六千八百　蠶絲王國確立を目指しての釜數整理は期間中手續遅延反行爲等もあつたが組合聯合會の努力で昨冬終了との春挽から統制下に第一歩を踏出す事になつたが實施前七〇四工場六六八四六釜が廢止三〇二工場一九四七四釜それに一部工場の合併整理等で三七三工場四〇七八二釜に整理され之が補償金は二五一〇五二四圓を達し全國の三分の一と云ふ數字に達してゐる。此處に釜數別設備狀況を見ると左の如し。

△五十釜未滿一八七工場四八七二釜△百釜未滿七二工場三六三九釜△二百釜未滿五五工場八四一三釜△三百釜未滿三一工場七三〇三釜△五百釜未滿一六工場五九四七釜△千釜未滿一〇工場六九三〇釜△千釜以上二工場二六七二釜△合計三七三工場四〇七八二釜

上小養蠶五十三万圓の增收　上田商工會議所調査に依る上小十二年度春夏秋繭生產高は左の通りである（括弧内前年）

△上田　春繭養蠶戶數六〇三戶上繭一六七三三貫一〇三二八七圓玉屑繭一五九九貫五九三五圓計一八三三二貫（一七一一八貫）一〇九二二二圓一戶當掃立四六瓦收繭量三〇貫（一一七貫）收入一八〇九圓（一八八瓦）收繭五七貫（五四貫）收入三〇二圓（二七八圓）

△小縣　春繭養蠶戶數一二四三六戶上繭三八六〇一一貫二三八〇三四一圓玉屑繭三六二二五貫一二三四六八圓計四二二二三六貫（三八六九五二貫）二五〇三八〇九貫一戶當掃立五六瓦收繭量三四貫（二〇貫）收入二〇一圓、夏秋繭養蠶戶數一三四五八戶上繭四六〇二八五貫一二二七五六一四圓玉屑繭五八二八〇貫一四六九九八圓計五一八五六五貫（四六九一四一貫）二四二二六二二圓（二四三四八五四貫）一戶當掃立八四瓦收繭量三八貫（三四貫）收入一八〇圓（一八一圓）計養蠶戶數一三六四九戶上繭八四六二九六貫四六五五九五五圓玉屑繭九四五〇五貫二七〇四六六圓計九四〇八〇一貫（八五五九〇四貫）四九二六四二一圓（四四二〇五五〇圓）一戶當掃立一三四瓦（一四二瓦）收繭量六九貫（六五貫）收入三六一圓（三四〇圓）

春夏秋繭を通じ前年より上田は五千二百六十九貫の三万八百七十二圓增小縣は八万四千八百九十七貫の五十万五千九百七十一圓增、掃立は減少せるも收繭量及金額に於て增加し養蠶家も惠まれた事を物語つてゐる。

戶數割三割追徵か　上田市の財政は著しい資金涸渇から年末せまつた最近戶數割增徵論が擡頭し市民に衝撃を與へてゐる。即ち防空演習費四千圓の支出濟臨時費を筆頭に縣稅輕減に依る市稅附加稅歲入減九千圓及既決事業として本年度當然支出を要すべきものに保健所地元負擔七千六百圓、鐘紡前縣道新設に伴ふ天神町鐵道ガード新設費一万一千四百圓、水源地ポンプ聯入費八千圓等があり更に事變に依る更員臨時雇數名の給料、兵士歡送諸費應召家族輕稅等を合すれば總計四万六千圓に及ぶ。之等の財源は全く無いので此の際苦塊切拔け手段として十二年度戶數割の三割追徵斷行論が起るに至り實施期は十三年一月から二月とされてゐるが十二年度戶數割は約十四万圓で三割追徵四万二千圓が追加となる譯である。一方縣稅輕減に依る歲入缺陷に對しては内務省に再三陳情幾分補助金交附の豫想であるが從來放慢をを極めた財政も全く行詰りを來した。

蠶種製造家の生產高　上小の蠶種製造家を製造瓦數に依つて區分すると次の如くで五千瓦以上二万瓦未滿の製造家が全體業者の四割を占めてゐるが此の程度の中位製造家は逐年減少の途を辿つてゐる

△一千瓦未滿十六名五一五〇瓦△一千瓦以上四十名一三四三八六瓦△五千瓦以上六八名五一二四八一瓦△一万瓦以上八十名一一三五三六二瓦△二万瓦以上四三名一〇五九四八七瓦△三万瓦以上三八名一四六二一六瓦△五万瓦以上二八名一八一二六二一瓦△十万瓦以上九名一〇一〇一〇一五五瓦△十万瓦以上三名五〇一〇五六瓦△二十万瓦以上一名△三十万瓦以上五一名二八一三九〇七一瓦

藤本蠶業が原蠶種製造　原蠶種國家管理に伴ひ自家用原蠶の飼育は取締當局の許可が必要となり昨秋中蠶種業組合小縣支部は二三回の役員會で許可申請に就て研究をし大量製造蠶種家は自家用原蠶飼育許可を申請中であつたが今回北信地方では鹽尻村藤本蠶業のみ許可され縣下に於ては僅々二ケ所である。

上小蠶種家の經營別調べ　上小地方蠶種製造家三百三十八名を經營形態別に見ると個人經營が三百二十二名、業者數に對し九割五分、生產グラム數七三九五四七七瓦で全體に比して七割一分八厘、株式會社三名、業者比率九厘、生產數一八九一六一六五一割八分三厘、合名會社四名一分二厘、生產數二二五〇三五二分二厘、合資會社八名二分四厘生產數六七一四九七瓦六分五厘、營業製絲一名三厘、生產數一二六二六〇瓦一分二厘の成績で業者別比率と生產比率差の多いのは株式會社と營業製絲家であつて生產人員に比し生產數が多く大企業化への傾向が明らかで唯一人の營業製絲家笠原組の蠶種製造は上小地方のみならず更埴にも相當數量の生產量があり蠶絲業の縱斷化が現はれてゐる。

繭質改善奬勵金交附　昨年四月三十日附申請の上小地方本年度繭質改善養蠶實行組合奬勵金は上田市常磐城第一養蠶實行組合五五圓、同須川共榮養蠶實行組合五四圓外郡下卅三組合（改良族製造機費三百五十三圓、事業費一千三百六十五圓計一千七百十六圓が交附された。

母校ニュース

狸を生捕る　歳末の母校に山の奥にでも起りそうな狸生捕りと云ふナンセンス事件が起つた。十二月十八日夜十時頃化學の宮下業手が蠶絲化學教室のドアを開放せる儘便所へ行つた處便所附近から奇妙な獣物が化學教室へ飛込んだ。行つて見ると二階へ行く階段の途中にうづくまつてゐる。尾は太く目の様子等犬猫とも違ふ。一先づドアを閉めて夜勤の連中を呼び集め原勤の中澤業手、本舘の市川業手、松澤守衛等來り再び恐る〳〵見聞の結果狸だらうと云ふ事になつた。狸なら怖くは無いし又恐らく高價なものであるから生捕りにしようと衆議一決、病理教室へ行つて兎の箱を持參し階段の途中に追ひ詰め難なく捕押へ箱に入れ拾得物として警署へ持參せるは十二時頃であつた。その時には何處からも遺失屆は出てゐなかつた。然るに二十日に至り警察よりの電話にて右は北海道小樽より上高井郡綿内村西澤某へ送る狸にて雄二百圓雌四百圓の價格表記で羽越線經由送附の途中長野驛で降ろすのを如何なる間違ひか上田迄來りその間に於て一番の内の雌が逃出したものであるとの事であつた。そんな譯で二十圓の謝禮を貰つてケリがついたと云ふ噺である。

戰死三氏の市葬に參加　十二月廿一日午後一時半より上田小學校北校に擧行されたる事變戰死三氏に對する市葬執行せられ本校よりは職員學生全部參列した。

拜賀式　一月一日午前九時三十分より講堂に於て全校職員學生出席四方拜々賀式を擧行した。

山岳部スキー講習會　山岳部では部員一同講師となり昨年十二月廿六、廿七、廿八の三日間及び一月六、七、八の三日間菅平スキー場に於てスキー講習會を行つた。

松田明文氏退職　十一年十月以來圖書課に雇として勤務せられし松田明文氏は兵役の爲め一月四日退職され一月八日午前十時十四分上田驛發にて入營されたが本校職員多數見送つた。入營先は松本歩兵第五十聯隊長田隊佐藤隊五班である。

三學期開始　冬期休暇は一月十日迄で十一日時間割發表、十二日は一時間目は第四教室に於て全校職員學生參集、校長より非常時局に際會し一層緊張して學業に精勵すべき旨訓示あり引續き學生七名のスキー遭難者救助に對し激賞の言葉がありて終了、第二時間目から授業に入つた。

山崎ゆり氏退職　製絲科教婦山崎ゆり氏（教一）は濟南の伯父上の許へ行かれる事になり一月十四日附を以て退職されたが在職期間四年十ケ月である。尚同氏は當分の間東京神田區旅籠町一ノ一八宮下清氏方に住居せらるゝと聞く。尚同氏の仕事は今後磯村敏子氏が受持たれる事となつた。

スキー指導者講習會に二氏受講　文部省主催第六回スキー指導者講習會は一月六日より十五日迄菅平高原文部省體育研究所に於て開催されたが本校よりは志賀章雄、鷹野誠一兩氏が受講された。

第四回文化講義　十二年度第四回文化講義は一月十五日午前十時五十分より午後零時五十分迄二時間に亘り講堂に於て東京文理科大學助教授加藤仁平氏に依り「新興報德教育」と題し擧行され全校生徒及職員の大部分聽講したが二宮尊德先生の教化に付き詳述せられ學生一同に多大の感銘を與へ學生の訓育上甚大の効果があつた様である。

三學期總代任命　第三學期の總代副總代は選擧に依り一月十七日左の如く任命された。

總代	若林康弘	副總代	市原政治
蠶三	長末方夫	蠶二	青山武
蠶一	小山富治	絲三	村澤功
絲三	吉川啓人	絲二	尾崎孜
絲二	南木嘉一	絲一	山岸琢次郎
絲一	御子柴希太郎	紡二	金子肇
紡三	柳澤柳二	紡一	平林孝方
紡二	飯田武門	教二	淺井清
紡一	村本才登	教一	田路治男
教二	中澤澄子		柳澤連子
教一	小林トミ子		片山幸

備瀬眞孝君入營　紡一學生備瀬眞孝君は一月二十日熊本歩兵第十三聯隊入營の爲め休學した。

神保助教授退職　十一月廿五日新任せられたる許りの數學物理擔任助教授神保松雄氏は病氣の爲め一月廿二日附退職されたが誠に御氣の毒の至りにて一日も早く快癒されん事を祈る次第である。

實業學生號寄附　全國實業學生號飛行機獻納寄附に對し職員より七四圓五十錢集り一月廿四日送附した。學生は一名三十錢宛にて取纒中である。

山口直吉氏退職　昨年九月以來製絲科に副手として勤務せられし山口直吉氏（絲二四）は今回海軍航空廠兵器部火工課へ就職せらるゝ事となり一月廿五日附退職された。

寒稽古　恒例の寒稽古は一月十七日より二週間に亘り柔劍道は毎朝五時半より七時迄依田、志賀兩師範指導の下に母校道場に於て又弓道部は毎朝七時より八時迄母校弓場に於て行はれた。本年は例年に見ざる酷寒であつたが非常時局の反映で全員眞劍に練習した。職員の出席は校長先生を始め井上、和田、石倉、原田、岡、佐藤（春）、行元、野口、谷、山口、小松、湯原、石井、都筑、宮原の方々で特に柔道に於て岡、行元、劍道に於て行元、野口、谷、小松、石井、宮原の諸氏が學生に交つて稽古せられた御元氣は偉とするに足る。斯くて三十日の納會には汗粉の纒應があつて盛會裡に終了した。皆勤者は柔道一年間十八名、三年間十二名、劍道一年間四十名、三年間十二名、弓道は一年間十六名、三年間一名であつた。

談話會例會　第三學期談話會は二學期に引續き宮坂收、鷹野誠一兩氏が世話せらるゝ事となりその第一回は一月廿八日午後四時より千曲會舘樓上に於て開催された。談話者及談話題目左の通りである

一、どきぶりの食物消食管通過に就て　武井仙太郎

弓道寒稽古納會試合及昇段審査　弓道部寒稽古納會は都合に依り一月廿九日午後一時より弓道場に於て開催、同時に水上師範の來會を乞ひ昇段審査を行つた。競射成績左の如し。

選手　一等　絲三　小松忠幸　九中
　　二等　蠶一　伊藤嘉三郎　七中
部員　一等　紡三　齋藤生實
　　二等　蠶一　今井正吾
　　三等　絲一　中川力男
一般　一等　絲三　中村達
　　二等　絲三　吉川啓人

金的（一光）　蠶一　伊藤嘉三郎

審査の結果昇段者左の如し。

二級　絲一　中川力男
　　絲三　吉瀬重正
一級　蠶一　森本彰
　　絲一　笹川嘉隆
　　絲一　小林剛
　　絲三　吉川啓人
準初段　蠶一　木内庸一
　　絲三　中村達
初段　蠶一　今井正吾
　　紡三　齋藤生實
準二段　蠶一　伊藤嘉三郎
　　絲二　宮田皓
　　蠶二　太田光
準三段　絲三　小松忠幸

送別演奏會　音樂部では一月廿九日午後六時より上田市商工會議所樓上に於て卒業生送別演奏會を催したが曲目及主演者を左に示す。

第一部　一、ハーモニカ合奏「校歌」（上田万年作詞、東京音樂學校曲）　二、ハーモニカ合奏「君ケ代行進曲」、吉本光藏曲）「軍隊行進曲」（シューベルト曲）三、三曲合奏「古曲まゝの川」「新曲椿の蕾」　箏間瀬雅靜社中、尺八都山流會員　四、ヴァイオリン獨奏「タイスの冥想曲」「スペニール」稅田　五、ハーモニカ二重奏「ゴゼックのガボット」「カール王行進曲」「新内流し」　箕輪、宮田、稅田、土屋、

第二部　一、マンドリン二重奏「新春雨」日幡、鹽入　二、ハーモニカ合奏「愛國行進曲」（鹽入編）　三、三曲合奏「古曲末の契」「新曲飛躍」　箏間瀬雅靜社中、尺八都山流會員　四、獨唱「軍國子守歌」「愛國行進曲」　楠八重、

休憩　間奏曲、マンドリン合奏「スパニッシュ、セレナーデ」「ラスパニョラ」「谷間の灯」阿形、日幡、宇田、中錦、稅田、鹽入、宮田、野島、

第三部　一、アコッディオン獨奏「ジプシー、タンゴ」「ドンホセ」日幡　二、ハーモニカ獨奏「荒城の月外數曲」稅田　三、ハーモニカ合奏「双頭の鷲の下に」（ワグナー作曲）「ダニューブ河の漣」（イヴアノヴイチ作曲）

卒業生　都筑、日幡、阿形、宇田、内間、金丸、有賀、進野、小畠、早田、松吉、金井、

音樂部員（ハーモニカ）阿形、稅田、都筑、箕輪、宮田、土屋、中錦、田中野島、龍谷、鹽入、丸山、長澤、宇田三宅、柴田、（アコッディオン）日幡、都筑、中錦、（マンドリン）阿形、日幡中錦、宇田、（ヴアイオリン）稅田、（ギター）鹽入、宮田、野島、（都山流尺八）濱田、内間、進野、小畠、早田、金丸、有賀、松吉、橋本、矢澤、冬泉（琴古流尺八）金井、（箏、特別出演）間瀬雅靜社中、

第四回北信濃スキー大會　一月三十日松代郊外地藏峠スキー場にて松代スキー倶樂部主催第四回北信濃スキー大會開催本校山岳部より三年生都合惡く參加不能の爲め二年以下新メンバーにて出場す。天候午後吹雪、積雪五十糎、コンヂション不良であつた。參加は菅平スキー倶樂部、長野山岳會、松代商、松代スキー倶樂部、須坂中、上田菅林、長野林友、長野菅林、山田スキー倶樂部、本校の十倶樂部であつた。成績次の如し。

十粁レース（出場十三名）（北村棄權）

八等　武井（絲二）　一時二四分三十秒

一粁不倒滑降（出場三十三名）

二等　目崎（蠶二）　三十七秒F

九等　岡田（絲一）　四十六秒八

スラローム（出場二十一名）

六等　目崎（蠶二）　二十八秒六

柔道寒稽古納會試合　一月三十日午前五時半より母校道場に於て柔道寒稽古納會試合を行つた。戰績左の如し。（側線は學生以外、選手を除く）

先鋒　×○柿澤―田口
　　○○佐藤―今井×
　　×○楠八重―竹内
　　納谷○―宮坂
　　×小林―柳澤×
　　×阿久津―江崎×
　　木村×
大將　○△北澤―小林（九）

山崎菅錄氏の圖書課入り　養蠶科勤務副手山崎菅錄氏（絲十九）は入營の爲め退職せられたる松田明文氏の後任として一月卅一日より圖書課に雇員として勤務せらるゝ事となつた。

白倉一男氏昇進　製絲科に給仕として勤務せられし白倉一男氏は一月卅一日附を以て雇に昇進し養蠶科事務室に勤務せらるゝ事となつた。同氏は上田市帶入の出身上田中學校昭和十一年卒直ちに本校に勤務せられしものにて本年二十歳の新進氣鋭の士である。

入學志願者數　二月七日現在の入學志願者は養蠶五十七名、製絲九十八名、紡織百六名、合計二百六十一名で昨年同日に比し八十三名多い。此の内無試驗入學志願者は一月卅一日締切つたが養蠶十名製絲一名紡織三名であつた。

卒業證書授與式案内

拜啓　愈々御清穆の段奉慶賀候、陳者來る三月十五日午前十一時より本校内に於て第廿五回卒業證書授與式擧行可致候に付御貴臨の榮を得度此段御招待申上候　敬具

昭和十三年三月一日

卒業生各位　上田蠶絲專門學校長　針塚長太郎

追て饗宴會場準備の都合も有之候に付き御臨席の有無午御手數必ず前日迄に御一報相煩度爲念申添候

入學案内

一、募集人員　養蠶科、製絲科、絹紡織科、通計約百名
一、出願期日　一月十一日より三月十五日迄
一、試驗檢定　一月十一日より一月廿一日迄
一、試驗科目　數學（代數、平面幾何）英語（英文和譯）
一、試驗期日　三月二十日（午前學科、午後體格檢査、口頭試問）
一、試驗場所　上田（本校）東京（文理科大學）岡山（醫科大學）名古屋（愛知縣廳）京都（高等工藝學校）福岡（九州帝大農學部）
一、入學案内書入用者は郵券三錢封入本校教務課宛申込次第送附す

製絲教婦養成科入學案内

一、募集人員　約十五名
一、出願資格　一高等女學校卒業者又之れと同等の學力を有する者　二高等小學校卒業後一ヶ年以上製絲業に從事せる者
一、出願期日　一月十一日より三月廿三日迄
一、試驗科目　數學（算術、代數、平面幾何）國語（作文を含む）
一、試驗期日　三月廿六日（午前學科、午後體格檢査、口頭試問）
一、試驗場所　上田（本校）
一、入學志願者心得入用者は三錢切手封入本校教務課宛申込まれたし

上田蠶絲專門學校

出征會員慰問資金募集に就て急告

本會出征會員に對する慰問金募集の件に關しては御承知の如く本紙十二月號に趣意書を同封して御願ひ申上げた樣な次第であります。其の後本會の趣旨に御賛同下さいまして早速御獻金賜はりし各位は別項登載の通りであります。洵に感謝の至りに堪へません。然れ共期間が餘りに短期間なりきまして目下引續き毎日御送金に接し本會の狀態は右拂込期限を當分の間延期致します。今や時は金額募集に努力致す覺悟で御座います。多々難の際南北支那第一線に活躍せる吾同窓諸君の勞苦に想ひを致す時は實に感激の至りに堪へません。何卒本會設立の趣旨を御諒察の上奮つて御獻金賜はらんことを御願ひ致す次第であります。

上田蠶絲專門學校同窓會銃後會

支那事變應召者に就て御願ひ

支那事變の爲め應召されより逐次會員動員されて居りますが、就きましては本會々員に就ては其の芳名を本紙九月號あるやを懸念致します。然れ共未だ調査洩があるや本紙登載以外に應召會員御承知の方は左記事項至急本會迄御一報の程御願ひ致します。尚今後應召された場合には御家族は勿論會員にして御存じの方は速かに御通知下さる樣御願ひ致します。

一、應召者氏名
二、家族の現住所及氏名（留守中通信先）

本會日誌

十二月二十六日　千曲時報發行日（一月號に限り變更）
十二月二十七日　發行と提出す
十二月二十八日　故中島健彌氏の告別式
原隊に於て執行せらる。茨城千曲會長
一月十日　尊父御逝去
一月十三日　靜岡千曲會に付電報にて弔意を表す。
一月十九日　書面を以て弔意を表す。
針塚會長出席せり。
二月二日　執行せられる。
二月三日　別式
二月四日　理事會開催
他の件に就き協議す。

熊本千曲會

熊本千曲會の爲め長らく盡瘁せられし（會長事務取扱）太田慎一郎氏が先般國葬の如く變更せられたり。宮崎支場、御榮轉の結果同會の陣容も左

事務所　熊本縣蠶業試驗場内深迫明氏
同　熊本市出水町　長野忠顯氏
同　小川春男氏
幹事　深迫明氏
副會長　若林新一郎氏
會長　父母仙藏氏

北九州千曲會

客年十一月二十日福岡市古溪町金吉に於て第六回總會開催せる。
當日北九州千曲會第六回總會長以下十八名並に決議事項左の出席の通り。
一、支會規則中一部改正の件
二、昭和十三年度收支豫算の件
三、自昭和十年一月至昭和十年十一月收支決算承認の件
以上原案通り可決
四、役員改選の件　左の通り決定す。
會長　藤勝四郎氏（福岡）
幹事　宮澤岬氏（佐賀）
同　栗原章氏（長崎）
同　岩田正氏（大分）
同　楠田元之助氏
五、顧問推戴の件
九州帝大の田中義磨先生を顧問に推薦せり。

會費領收（二月五日現在）

昭和十二年度會費

	金
平澤滕（蠶三）	四圓也
加々井精喜（蠶三）	繁（蠶八）
松本一二（蠶六）	小林茂一郎（蠶七）
中澤利三郎（蠶七）	阿部直秀（蠶七）
金澤勇（蠶九）	宮崎利雄（蠶七）
塚田庸男（蠶十）	半田義雄（蠶十）
淺川樹（蠶廿）	辻春義雄（蠶廿）
茂滿（蠶廿）	戸髙俊秀（蠶廿）
成尾喜八郎（絲大）	原峻三郎（絲廿）
飯島貞雄（紡一）	榊彦男（蠶廿）
小林尚一（紡八）	今村與志郎（紡五）
諸岡英市郎（紡十）	寺井子藏（紡十）
未納會費	
平岡英司（蠶廿一）	金四圓也
佐一郎（蠶廿）	塚本戸田輟三（絲廿）

銃後資金寄附者第二回

	金
百瀬矢野宗太郎（蠶廿）	圓也
宮下哲彦（蠶廿）	圓也
石倉元隆（蠶廿）	圓也
森山勳（絲廿）	圓也
丸山恒（絲廿）	圓也
高橋英三郎（紡十）	圓也
大池恒（絲廿）	圓也
和田敦（蠶大）	圓也
五圓也	
齋藤利雄（蠶廿）	圓也
香泰（蠶廿）	圓也
齋藤章（蠶廿）	圓也
町野嚴（蠶九）	圓也
原茅谷次郎（蠶廿）	圓也
多田作造（蠶廿）	圓也
桂元三（蠶廿）	圓也
齋藤修九一（蠶廿）	圓也
鈴木玄（絲大）	圓也
水上精一（絲廿）	圓也
長谷川恒三（絲廿）	圓也
志賀覺（絲廿）	圓也
小井土英二郎（絲廿）	圓也
和野辨太郎（絲廿）	圓也
田口清一（絲廿）	圓也
田宮幸一（絲廿）	圓也
坂三郎（絲廿）	圓也
宮藤雄（絲廿）	圓也
首藤行（絲廿）	圓也
黑瀨信勝（絲廿）	圓也
佐藤澤郎（絲廿）	圓也
七一郎（絲廿）	圓也
琢郎（絲廿）	圓也
佐藤正郎（絲廿）	圓也
千吉良二郎（絲廿）	圓也
門田勇（紡十）	圓也
山本彼（紡十）	圓也
東條敬（紡十）	圓也
市村督（紡十）	圓也
黑田藤次郎（絲廿）	圓也
田中峰（絲廿）	圓也
和田村（絲廿）	圓也
田口猪（絲廿）	圓也
宮坂武（絲廿）	圓也
岡庭治（蠶廿）	圓也
中村喜一郎（蠶廿）	圓也
渡邊善次郎（蠶廿）	圓也
和田作（蠶廿）	圓也
金五圓也	
森丸山勳（絲廿）	圓也
石倉元隆（蠶廿）	圓也
原滿洲雄（蠶廿）	圓也
宮下和三郎（紡十）	圓也
矢野宗太郎（蠶廿）	圓也
瀨一彥（蠶廿）	圓也
百瀨哲（蠶廿）	圓也
完納者	
入會金納者	費完納者

千曲會規則第九條第一項第二號による會費完納者

	金
河野治（蠶廿）	圓也
原芳（蠶廿）	圓也
金塚作（蠶廿）	圓也
白井好（蠶廿）	圓也
西山榮（絲廿）	圓也
牛草德（絲廿）	圓也
宮城喜（絲廿）	圓也
鈴木治（絲廿）	圓也
坂口明（絲廿）	圓也
宮坂榮（絲廿）	圓也
鈴木育（蠶廿）	圓也
藤井三（蠶廿）	圓也
秋山宗雄（蠶廿）	圓也
岸俊雄（蠶廿）	圓也
仁尾恒一郎（蠶廿）	圓也
鷹野幾（蠶廿）	圓也
宮城貞雄（蠶廿）	圓也
西澤政人（蠶廿）	圓也
香山一郎（蠶廿）	圓也
橫內一郎（蠶廿）	圓也
加藤源沼（蠶廿）	圓也
小柳藤夫（蠶廿）	圓也
望月藤一郎（蠶廿）	圓也
馬場順平（蠶廿）	圓也
長谷川弘（絲九）	圓也
瀧澤芳（絲廿）	圓也
依田實（絲廿）	圓也
伊藤猛（絲廿）	圓也
太田三郎（絲廿）	圓也
武者彥（絲廿）	圓也
小泉安（絲廿）	圓也
管屋忠（絲廿）	圓也
小田貞（絲廿）	圓也
中澤治（絲廿）	圓也
田口實（絲廿）	圓也
平澤和（絲廿）	圓也
土司男（絲廿）	圓也
羽生滿（絲廿）	圓也
古田力（絲廿）	圓也
土屋二三男（絲廿）	圓也
菅野尾源（紡十）	圓也
小澤利治（紡十）	圓也
野間直雄（紡十）	圓也
土屋之（紡十）	圓也
天野彰（紡十）	圓也
小林典夫（紡十）	圓也
花岡政庫（紡十）	圓也
植村滿義（蠶廿）	圓也

金壹圓也

	金
田壹（蠶廿）	圓也
金圓（蠶廿）	圓也
晉谷（蠶廿）	圓也
古關（絲廿）	圓也
寄一郎（蠶廿）	圓也
五十嵐（絲廿）	圓也
吉田健（絲廿）	圓也
榮治岡（絲廿）	圓也
滄村（絲廿）	圓也
大源（絲廿）	圓也
塚一倉橋（絲廿）	圓也
重藏琢（絲廿）	圓也
吉伊而（絲廿）	圓也
津柳中（絲廿）	圓也
柏作澤（絲廿）	圓也
竹內忠（絲廿）	圓也
濱井太（絲廿）	圓也
眞喜田（絲廿）	圓也
榮夫慎（絲廿）	圓也
金壹圓也	

累計金五百八拾五圓也

右合計金五百六拾四圓也

朝倉昇氏衆議院議員立候補後援會費收支精算報告書

收入之部

一金六百二十一圓也　寄附金收入總額

支出之部

一金六百二十一圓也　支出總額

支出內譯

一金五百圓也　朝倉昇氏へ贈呈

一金百圓也　應援辯士費

金五十圓也唐木田氏へ、金五十圓也猪坂氏へ

一金二十一圓也　募集諸費

金十二圓七十二錢切手及端書代

金一圓二十錢封筒代、金七圓八錢印刷費

收支差引皆當

寄附者御芳名（略敬稱）

以下現金又は爲替に依る受領順

一金十圓也　八木誠政
一金十圓也　佐藤良太郎
一金十圓也　栗林悅
一金十圓也　倉澤美德
一金五圓也　齋藤菊雄
一金五圓也　野口新太郎
一金五圓也　岡部康之
一金十圓也　林貞三
一金十圓也　須田吉二
一金十圓也　飯島正胤
一金五圓也　中澤勝也
一金二十圓也　蒲生俊興
一金十圓也　奥田達雄
一金十圓也　白澤幹
一金二十圓也　花岡作彌
一金十圓也　水野健吉
一金三圓也　永田平
一金二十圓也　松野正一
一金十圓也　田浦準
一金十圓也　牧野金治郎
一金二圓也　原田兵衛
一金二圓也　高須兵司
一金二圓也　鍵谷傳
一金十圓也　松村季美
一金五圓也　穗坂小牧
一金三圓也　小澄晋

以下振替貯金に依る受領順

一金三圓也　水谷鄉一
一金十圓也　小中潔
一金十圓也　森田三郎
一金十圓也　高木三治
一金五圓也　鹽原克巳
一金十圓也　大窰政平
一金十圓也　依田信一
一金十圓也　佐谷戶健次郎
一金十圓也　佐藤尙雄
一金五圓也　豊部正巳
一金十圓也　田附卯一郎
一金十圓也　高畠秀男
一金十圓也　沖濤治
一金五圓也　芝荒雄
一金五圓也　松谷鐵之助
一金十圓也　山本辰五郎
一金十圓也　小林茂樹
一金五圓也　黑江文雄
一金十五圓也　岸勝彌
一金二十圓也　高田茂重郎
一金二十五圓也　小川保
一金十圓也　上原清夫
一金二十圓也　千曲會北陸支會
一金十圓也　菅原勇治
一金十圓也　前田龜雄
一金十圓也　石原石司
一金五圓也　皆川二郎
一金十圓也　遠藤文平
一金十圓也　高尾歲次
一金三十八圓也　福岡千曲會支部
一金二十圓也　湯川秀夫
一金五圓也　杉野壽一
一金五圓也　栗原章
一金五圓也　酒井來吉
一金五圓也　松井清三
一金十圓也　篠田平三郎
一金二圓也　小林忠吉（登坂彌市）

以上合計金六百二十一圓也

蠶絲學雜誌

千曲會員に限り送料共金貳圓（普通は參圓）

蠶絲學界の一大金字塔たらんとする本誌は昨年度より更に編輯部の充實整備と紙數及發行回數の增加によつて一大飛躍を期す。而して是れ一に千曲會員諸君の絕大の御援助によらざるべからず。第十卷第二號既に發行、從來購讀せられざりし諸君も是非一部を座右に備へて我等同窓學徒の研究を不朽に傳へられたし。切に望む。

岡宮辰夫君負傷癒え再び第一線へ

昨年十月末西保障の戰鬪で負傷せる遠山部隊歩兵上等兵養蠶選科三年生岡宮辰夫君は傷癒えて再び第一線に出て十二月一日附千曲會宛「小生も西保障で負傷して後は約一ヶ月にして退院、只今は全く健全にて元氣旺盛軍務に精勵して居ります云々」との通信があつた。（愚問袋に對する禮狀に於ける同君の書面參照）

中島健爾君の遺骨歸る

保定で戰死した歩兵伍長鹽尻村秋和出身養蠶選科三年故中島健爾君の遺骨は十二月廿九日午後二時廿九分上り列車で鄉里へ凱旋した。

山本金之助氏京都病院に入院

職傷加療中の山本金之助氏（絲二〇）は今回京都病院に輸送されしとて一月廿五日附林教授宛左の通信ありたり。

意外の御無沙汰に打過ぎ平に御許容被下度候。本日無事京都病院に輸送され候。小生今回の負傷に際しては多大の御心配に預り深謝仕り候。先般三谷勝樣御見舞被下され恐縮致し居り候。その節學校に通知せぬと相當叱られ候。小生の負傷も大腿骨折の爲めもう二三ケ月は歩行不能と存じ候。至極元氣旺盛なれば乍他事御安心被下度候。先は平素の御無沙汰御詫旁々近況御報告申上候。

叙任辭令

母校之部

一月四日　雇　松田明文

願ニ依リ雇ヲ免ス

一月十四日　教諭　山崎ゆり

願ニ依リ教諭ヲ免ス

一月二十二日　助教授　神保松雄

依願免本官

一月二十四日　中澤二郎

臨時副手ヲ命ス

養蠶科勤務ヲ命ス

一月二十五日　副手　山口直吉

願ニ依リ副手ヲ免ス

一月三十一日　副手　山崎嘗錄

圖書課勤務ヲ命ス

雇ヲ命ス　敎諭　磯村敏子

製絲科勤務ヲ命ス　給仕　白倉一男

雇ヲ命ス

養蠶科勤務ヲ命ス

職員之部

叙勳六等授瑞寶章（一月十四日）　正六位　宮島德一郎

卒業生之部

叙正六位（十二月十五日）　從六位　岡村源一　同　皆川二郎　農林技師　原田兵衛

四級俸下賜（十二月二十四日）　同　上野榮仁

五級俸下賜　蠶絲試驗場技師　高須兵司

六級俸下賜　生絲檢査所技師　小笠原振一

八級俸下賜　公立實業學校教諭　花岡作彌

七級俸當分千六百拾圓下賜（以上十二月廿一日）　地方農林技師　岸勝彌

七級俸下賜（十二月二十七日）　地方農林技師　田浦準

岐阜縣農林技師ニ補ス（一月十三日）　公立實業學校教諭　江頭辰雄

七級俸當分千五百四拾圓下賜（九月三十日）　宮前邦雄

叙勳八等授瑞寶章（五月八日）　地方農林技師　鶴田定平

七級俸下賜（十二月三十一日）　正六位　佐藤良太郎

叙勳六等授瑞寶章（一月十四日）　生絲檢査所技師　伊藤勇龜

同　宮入誠一

同　大塚重藏

陞叙高等官四等　同　小笠原振一

陞叙高等官五等（以上一月二十一日）　地方農林技師　中島茂司

十一級俸下賜（一月二十四日）　公立實業學校教諭　野澤泰治

六級俸下賜　但當分年俸千六百八拾圓支給（十二月廿五日）　朝鮮產業技師　尾見祐八

十級俸下賜　慶尙北道產業技師ニ補ス（十二月二十八日）

寒中御見舞申上候

昭和十三年二月

千葉縣行德町飯ヶ島一三

田中福雄

本廣告は前月號謹賀新年廣告として申込まれたるものを編輯子が脫漏せしものにして同氏の御諒解を得て本月號に寒中見舞として掲載せるものである。此處に改めて紙上を通じ御詫び申上げる次第である。（編輯子）

轉任御挨拶

拜啓酷寒の候愈々御淸榮の段奉祝候陳者小生上田蠶絲專門學校在勤中は一方ならざる御懇情を蒙り奉深謝候、今般左記に就ては今後共不變御指導と御鞭撻とを賜はり度奉願候、時節柄御自愛專一に奉祈上候、先は御禮旁々御挨拶申上度如斯御座候　敬具

昭和十三年二月

櫻井隆夫

大日本生絲販賣組合聯合會

橫濱市中區北仲通五ノ五七（帝蠶ビル）

電話代表本局(2)三六三一番

新任御挨拶

拜啓嚴寒之候愈々御健勝之段奉大賀候、陳者今般小生儀お蔭を以て母校雇に昇進養蠶科事務室に勤務致す事と相成候に就ては今後倍舊の御指導御鞭撻賜度奉願候、先は乍略儀以紙上御挨拶申述度如斯御座候　敬具

昭和十三年二月

白倉一男

支會通信

山形支會總會だより

最上川河口にて　（K生）

當支會の總會は毎年早秋か、母校から恩師御來縣を下し開催して居つたが、最近會員に大異動があつたのと、日支事變關係等で延び〳〵になつて居つたらしい、全國支會の最も遲い總會だと思はれる。尙場所等も非常時局柄種々考へさせられたが矢張り會員增參主義の樹て前から（比較的會員の多い地方を選ぶとなると）止むを得なかつた。隨つて會議其のものを强熱の內に進行を計るには內外より溫味が高まらなければとの情味豊かな幹部諸兄の氣苦勞から縣下の名湯赤湯溫泉を選んだらしかつた。然し師走の二十九日と言へば部屋住ひの貴公子と雖も年末氣分であり、況してや一家を構へ債鬼を追拂ひながら新年を迎へなければならぬ筆者の如きは悲喜交々であつた。而して母校愛の發露から出席された會員は次の十一名である。（出席率五〇％强）

森　千城　古山　宗八　小山田啓三
二木　猪一　井上兵一郎　前田　雅弘
宮崎　秋雄　齋藤　幸藏　和田　敦
高橋　康輔　柄澤　富雄

會議次第は出征兵に對する銃後應援の件、代議員會報告の件、役員選擧其の他を附議深重に協議を行ひ終了後忘年會を兼ね大懇親會に移り遙かに本部の强化發展を祈り、校長閣下の御健康を祝し大日本强國の戰捷萬歲を唱へ酒間の『サービス』は地元幹事の氣轉で萬事OK裡に散會する頃は『トックリ』追加の獲得を强いて居る會員も居つた。役員は會長に丸川前會長重任せられ、前副會長今井氏は病氣引退に付き森千城兄新任せられ、幹事は前幹事再任と決定支部强化に一層協力することになつた。當會事務所も森兄宅に置くことにしたのである。尙特筆すべきは舊一九小野寺克治兄は箱入娘（庄內美人たるは言ふ迄もない）に入籍され姓を佐藤と改められ、絲二〇長谷川恒三兄は縣中央山形代表美人と華燭の典を擧げられ、芽出度新年を迎へられたるは御兩兄の爲め諸兄より祝福の辭を贈られたい。總會の時はいつも參加し皆勤の特志家だが今回丈け缺席せられたるは、以上の慶事が最近行はれたからで出席會員諸兄も自己の過去を追想して無理はなからう位に思ふて居つたらしい。もう一つ特筆の追加としたいのは當日圖らずも大先輩であり當支會多年の大幹部として有形無形に大功勞のあつた古山宗八兄（現宮城縣在勤）の參加せられたことは（家庭愛の集は同溫泉に近い）當會の大收穫であり、會議進行上一段と花を咲かせたことである。次に參加會員の義憤に燃へた超能筆的な寄せ書を紹介したい。

尙總會の場所と日時を明記すれば次の通り。

場所　赤湯溫泉　丹波館
日時　昭和十二年十二月二十九日　午前十一時より

七久里會の記

正月二日　於花屋ホテル

正月の會合は何んといつても溫泉ホテルがシツクリする。古い年のけがれを洗ひ新しい希望を迎へることは一休和尙でない限りそのまゝに芽出度いものである。東亞の永遠の日の爲に北支の野に或は上海南京の地に元旦から砲煙を浴び戰塵の巷を馳せる同窓、といはず縣民といはず日本國中の健兒諸兄の勞苦の姿を敬意と感謝の中に想ひ乍らも、そして又吾等も其の機を待つものでありながらも、矢張り正月は吾々が過去現在を省み更に未來を畫くに最も適切な時であらしめたい。吾々の趣旨を汲まれいつも万障を排して出席下さる大先輩各位に對し又此の會の爲に態々遠方から歸省出席して下さる諸兄の誠意を知る時只滿腔の感謝を捧げるのみである。

今年は竹內君も岩手の縣廳へ行つて地元も聊か心淋しき感があつたが三〇名の盛會を見て喜びに堪へない。

尙今年は双美會の諸君も他の會に續いて出席して下さつたが恰度昨夏〇月應召出征された坂本勝三君も嚴しい軍律中四十八時間の賜暇を得て歸省された折柄とてその立派な軍服姿を迎へ、又舊臘歸省中臨時召集令を受け〇日後に出征されるので誠に戰時氣分に溢れた七久里會であつた。

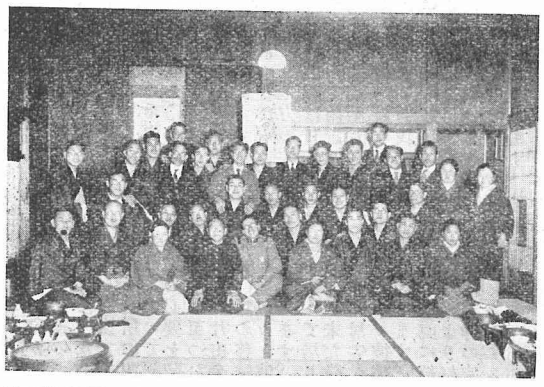
談笑時の移るを知らなかつたか、寄せ書をし寫眞などを撮影し蒲生理事長の音頭により千曲會萬歲、又竹內（好）君の萬歲を坂本現役兵の音頭により夫々唱和して閉會をした。

尙此の會の目的は千曲會の小集會たるべきものであるが從來いつも出席者の大多數が養蠶科出身者であつたが爲か他科出身の者の出席が少く、そこで特に今年は製絲科出丈け別に開いて見やうといふことになり七久里會へ出席の前提として前掲豫告の通り戶倉溫泉で製絲懇談會として開催されたが相當盛だつた由である。此の分では來年は更に七久里會も盛になりさうで喜ばしい。

因に出席者諸兄の姓名次の通りである。（順序不同）

蒲生、倉澤、齋藤、北島（正）、竹內（善）松岡、山本（友）、山下、若林（爲）、中澤（二）、細川（後）、宮坂、坂口（正）、市川（敏）、田澤、坂本、竹內（好）、吉田、橫澤、北澤（延）、町田（博）、新野青木（深）、小林（敏）、多田、金澤、關（博）、山口、他製絲科出矢島隆之助、山崎當錄、以上三〇名の諸兄。

寄せ書、寫眞は上の通り（幹事山口記）



製絲懇談會模樣

千曲時報十二月號に製絲懇談會通知なる廣告を掲載したが集つてみて驚いた事は廣告を見て集つた人の一人もなかつた事である。廣告の場所大きさ等は相當考へて適當に出した心意なのだが、これでは時報編輯者も張合ないといふものだ。併し、見なかつた理由を聞いてみると暮で最も忙しい時だつたからとの事でやゝ安心した次第である。最も注意して見る所は何處か聞いてみると住所の移動だけは何處よりも先に見るとの事であつた。これから是非みて貰ひたい廣告は住所の移動の眞中にでも置く樣にする事だ。

それはそれとして製絲懇談會は本年が初の試みであり、而も樣子をみるといふ樣な意味で千曲時報に廣告を出した以外は全然宣傳しなかつたので果して何人集るか多少の不安もあつたのであるが、結果はやり方の割合に好成績であり左記の如き各方面の專門大家が集まり、從つて數時間にわたつた座談會の內容は相當のものであり（其內容に關しては何れ絹堂氏が飯の種にされるんだらうと思ふから遠慮する）極めて好評であつた。此の次からも何とか方法も變へて益々意義あるものにしたいと思ふ。左に當日の顏ぶれと座談會後の宴會席上でものした寄せ書きをかゝげる。

中澤　忠、林　貞三、水谷鄕一
猪坂　直一、小宮山太助、依田寛之介
山田　斧一、茅野淸三郎、石井公男
鷹野　誠一、下村忠一郎、古平庄衞
島田　林助、宮下文四郎、一之瀨　茂
宮尾　行雄

滿洲千曲會より

開原湯川先輩の御宅にて除夜の鐘を聞き初詣は新京神社、初夢はハルピンで然も新婚の本間夫妻と詩人栗栖超と四人曙光を浴びて松花江に橇を走らせた。四人の心臟は完全に結氷しました。アジアにて大連への車中　三浦生

三浦大先輩の御入來、まるで御來光樣々！たつた一時間でハルピンの夢を見に行くことに決つた。時當に元旦―二日にかけての夢の國に迷つた。或は燈をより明るくともす者、貧血を起しさうになるもの、胸が高鳴るもの、いくらハルピン心臟でもこればつかりは。

二日午前八時、八時といつても滿洲の日の出は八時半だ。松花江のドン眞中で初日をおがんだが、實に嚴寒四十度、呼吸困難、息が凍つて！今日はお互ひ、甘い、辛い、夢を見つゝ歸途「アジア」はウナリつゝ走る。今年はいゝぞ。

本間

朝鮮から珍客、近藤二郎君を新京に迎へた。とても大工町のドブ板に紋付を着て引つかゝつてゐた男とは思へぬ垢のぬけ方に驚いた。近藤君は湯川さんを訪ねると云つて出て行つたきり消息を斷つた元旦には安東から三浦先輩を迎へて實に愉快。到頭ハルピンまで出て行つて凄い正月を過しました。近藤君は今尙行方不明。三浦氏はアジアにて大連へ。

栗栖記

戰場便り

根岸市郎君（紡二選學生）より

遙かに河南の戰線より謹んで新年の御挨拶申上げます。御丁寧なる御手紙正に拜讀仕りました。立派なる詩を大變有難う御座いました。毎日吟じて居ります。彰德ももうすつかり治り王道樂土が現出致しました。慰問品や恤兵品等も一度に押よせ唯今の處何の不自由もありません。これも皆銃後の皆様の熱烈なる御後援の御蔭と深く感謝致して居ります。今日迄知らなかつたのでありますが計らずも小生と小生の○○○官である萩原少尉は同窓生である事が分り早速面會に參り色々と學校の話を致しました。當地は寒いと小生も若くして元氣であります。何卒御安心下さい。先生には大變御年を召して居られるのでありますから何卒充分御禮を大切に。皆様によろしく。

（十二月十六日、校長宛）

田村亮氏より

時下冱寒に向ひ候折柄校長先生始め諸先生御一同様益々御清榮之段奉賀候。陳者私儀九月初旬北支の野に上陸以來色々と取紛れ御無沙汰のみ重ね失禮之段何卒御海容被下度候。御蔭様にて頑健その御にて聖戰に從事致し居り候間乍憚御休心被下度候。愈々永定河戰闘開始以來の勞苦が實を結ぶ運びとなり王克敏氏の行政委員長就任の情報を十二月十五日耳へ入れ候。十五日には○○○○○○も大名に飛行機にて飛來され吾が○○○○○と打合せの上歸還致され候。大名城内に於ても其の當日は住民歸來せるもの群集し新政權の誕生を祝福し祝賀行列など擧行され候。當方面の敵情は大體靜穩に候も殘敵處々に集結しその内には匪賊化するものもあり又は山西方面山東方面よりの敗殘兵通過するあり時々小さき衝突を致し居り候。然し午ら何者にも戰意を喪失し時には歸順を申し出るものも有之北支方面は大暑治安恢復せるものと存ぜられ候。當地の寒さは内地殊に長野縣等に比すれば餘り大差無く案外の暖かさに驚き居り候。當穗積城には同窓の竹内君が親側○○長として活躍し居る事は既に御承知の如くにて只今磁縣より大名に至る中間舊魏縣の警備のため分遣致され盛に活動致し居り候。内地も歳末にて益々御多忙の事と察上候。陣中の正月も又面白し、二日の仕事始めには殘敵掃蕩でもやり度しと念じ居り候。何卒御壯健にて御越年の程祈上候。

（十二月十六日、校長宛）

細川豐氏より

大變御無沙汰致しました。愈々おしせまり何かと御多忙の御事と存じ上ます。扨て過日は小生迄に年末賞與を御與へ下され誠に恐縮の至りにて厚く御禮申上ます。御蔭様にて先日○○海岸に於けるる實彈射撃も無事終了致しました。我が加藤隊が最も成績よく○○部隊長も全く驚嘆せる程にて一同安心し○○砲は初速が非常に速い爲め番も又非常に大きく從つて耳の鼓膜す。全く之の時ばかりは皆顔は青ざめて緊張してしまいます。「打て！」の號令がかゝると耳が非常に痛み口の中が砂でザヤミ〳〵します。その時彈丸が發射されたのです。耳が間もなくザーとしていますが此時はつらいです。然し後で考へると實に壯快なものです。來年は○日頃○○濱で○○目標に對する射撃があります。射撃がありますので昨晩迄夜間演習を致し眠も切つて居りました。我々の經驗から手を破つた砲の威力も又大した事は作さへ確實に行けば先づ百發九十中位迄には必ずゆきます。此の射撃に於てすつかり自信を得た次第です。今晩は南京陷落で祝の酒が出る事になつて居ります。我々は愈々これから頑張らなければなりません。先は右御禮旁々近況御報告迄。末筆ながら諸先生方に何分よろしく御願ひ致します。（十二月廿四日、校長宛）

小山重七氏より

厳寒の砌り御尊家皆々様には御勇健之段奉賀上候。扨て以來中は種々御蔭様にて預り難有奉感謝候。特別なる御配慮を以て途中無事某日某地に上陸する御蔭様にて前進又急進軍橋の架設假停車場及厄大なる軍需品集積場を構築再び急進する直に軍隊軍需品輸夜連續作業を實施し圓滑に軍隊軍需品輸送に萬全を期すべく志氣愈々昂り吾等本領を發揮し銃後各位の御期待に添ひ度努力致居り候間御安神被下度候。近日中に○○へ向ふ筈にて候。今や言葉も通ぜず内地の様子も不明にして買ふに店なく不足勝なる給與と濁水を飲み露命を繋ぎ居る戰場に在りて熟誠溢るゝ諸彦の心盡し遠く異境に在りて追懷し奉る之胸に迫り今更感激を新にして軍務の傍ら在り日を相互に語り合ひて一死報國を誓ひ居候。戰況並作戰等に就いては軍機の秘密を厳守すべく被命あり乍遺憾擱筆仕候。末筆乍ら御一同様御自愛專一を願ひ上げ候。

（元旦、校長宛）

荻原行雄氏より

陣中より御報告申上ます。當○隊は先だつてまで最前線警備部隊として彰德城附近の警備に任じつゝありましたが去る○月○○日突如上司の命令に基き豊樂鎮驛の警備隊として獨立勤務に服することゝなりました。當地は彰德北方四里の京漢鐵路の分岐點で御座いまして其の支線は遠く西方山地潤合鎮に延びて居ります。其の觀台鎮と言ふ處は御承知かと思ますが非常に質の良好なる石炭鑛のある處で御座います。四周は全くの片田舎で御座いますが村民一般は當○隊の移駐を非常に喜び何かれと色々と連絡をとり地方の安定に努めて居ります。爲めに近隣は日一日と安靜を加へて居ります。但し附近四五里の四周には未だ敵敗殘兵又は土匪等横行し良民の起居安からぬものが數々あります。着任早々彼等の賜により討伐に兩三回出て居ります。周囲に有する○○隊の政治工作上其の必要を認めて御座います。是から政治工作の完璧を期し以て帝國の眞の使命を完ふする心算で御座います。陣中に於て愈々昭和十三年の新春を迎へました。然し第一線の事と雖も風景面白き事と殺風景なもので御座いません。頗る和平の根本的確立の爲め眞に重要の時で御座います。我々は身命を賭しても天皇陛下の御爲めはたまた銃後の皆様の爲めぐる覺悟で御座います。先は右御報告旁々皆々様の御健勝を遠き北支の第一線より御祈申上ます。

（一月一日、千曲會宛）

中澤嘉人君（業手）より

謹賀新年、歴史的昭和十二年の御代も暮れ戰勝十三年を北支の地に迎へました。明朗な樂土と化しつゝ有り東洋平和の第一歩をふみ出しました。一月元旦午前八時祖國日本の空に向つて拜賀式を致しました。大日本帝國萬歳の聲力强く北支の天地に響き渡りました。新春を迎へ長期抗戰なにもの恐れ皇軍の士氣益々盛んです。一望千里の野を吹きまくつております。遠き北支那の地より校長閣下の益々御健康を祈上ます。

（元旦、校長宛）

新村幸三氏より

謹賀新年、年改りて御會の御發展に彌榮と御祈り申上候。偖小生去年○月○○に遇ひ南支に出征致し居候得共遂ひ御無沙汰のみ致り誠に申譯も無之候。御蔭様にて體と意氣は至極元氣にて軍務に精勵致居候へば御安心被下度御願ひ申上候。校長先生を始め諸先生、先輩御大兄の御挨拶をかね御無沙汰の御詫まで斯如御座候。

（元旦、千曲會宛）

福島善章氏より

謹みて意義深き新春を迎へ第一線陣中より遙かに平素の御無音を謝し併て貴家御一統様の萬福を御祈り申し上げます。皇道は眞の平和を確立の爲め實力を進めし皇道之布、正義人道の楯駒を陛下も存じます。斯くの如き重要なる驛で有りまする處で品質の良好なる産額の多大なる場所に四一と言はれて居る處で御座いまして朝に一陣を拔き夕べに一城を陷すする大言通り將に破竹の勢ひで戰闘を續け北支に殘せる戰線百五十有餘里の足跡は新しき時代の歴史の一頁を飾る事でせう。鄉土部隊とし皇軍の一員として熱誠溢れる鄉土の皆様を盡し御後援に添ひ幸ひにも今日尚志氣益々軒昂、派ぎる闘志は滿を恃し、銃劍も凍る北支の原頭に、光輝昇天の新春を迎へ得ましたるは小生の最も光榮の至りと存ずる次第で、銃後の各位の限りなき御後援の賜もの深く感銘致し今後相變らずの一層の御鞭撻御激勵の程願ひ申上げます。

（元日、校長宛）

西川晋氏より

謹賀新年、御無音にのみ打過ぎ何卒御海容被下度候。杭州沖より敵前上陸以來金州城、嘉善、湖州、廣德等○○○と共に南京に向ひ進軍仕り南京前二十數里にて○○○閥付無線となり第一線に加はり杭州に逆行仕り候。吾が○隊は無事目出度く杭州にて正月を迎へ候へば他事乍ら御放念被下度候。杭州城は南京に次ぐ大都會にて建築物、樹木、湖水の風景等滿洲と全く趣を異にして支那とは思はれざる程に御座候。○○は○○の間題と存じ候へ共今日迄吾信不通にて一般社會の狀勢皆目不明にて種々論ぜられ居り候。戰爭も終局に近づき候へ共尚一層奮闘仕る覺悟に御座候。先は新年の御挨拶旁々近況迄申述べ候。尚皆々様に宜しく御傳へ被下度候。

（一月一日、校長宛）

池内眞吾氏より

校長先生から御激勵の言葉と共に頂いた記念の日章旗が立派に役立ちました。十二月十二日午後三時半小生は日章旗を打ち振り乍ら南京城門の爆破に成功しました。校長先生にも大いに喜んで頂ける事と信じます。去る十二月十日思出の南京を去り十二月三十日湖州に到着當地に警備につくと同時に新なる昭和十三年の新年を迎へました。杭州へは十六里の地點にあります。只今警備○○の手により土民の宣撫工作は着々と進み連日歸着する避難民の敗知れず市内に到る所に湖州治安維持會は設立され眞の明朗なる支那建設のため中支一帶に治安の完全に既に維持されるのも遠からずと信じて居ります。然し附近の山地には時折敗殘兵の出沒するものあり今の所未だ治安とは申されません。戰闘一段落と共に我々日本軍のなすべき仕事はこれからだといふ氣持が致します。陣中につき亂暴なる走り書きにて失禮の段御許し下さい。先は不取敢近況御報告申上ます。

（一月六日、校長宛）

藤澤喜一郎氏より

謹賀新年、歴史的昭和十三年を北支の地に迎へました。明朗な樂土と化しつゝ有り東洋平和の第一歩をふみ出しました。一月元旦午前八時祖國日本の空に向つて拜賀式を致しました。大日本帝國萬歳の聲力强く北支の天地に響き渡りました。新春を迎へ長期抗戰なにもの恐れ皇軍の士氣益々盛んです。一望千里の野を吹きまくつております。遠き北支那の地より校長閣下の益々御健康を祈上ます。

（元旦、校長宛）

山崎保太氏より

御書面喜しく拜見仕り申候。上海上陸後平站勤務を命ぜられ○○の監視を十日間餘り此れを後備○隊に續つて本隊を急追南京攻撃に參加すべく連日强行軍を續け申候處遂ひ間に合はず途中本隊の後退するに逢ひ引返して太湖西南端長興にて陣中の新年を迎へ申候。南京攻撃に參加能はざりしは殘念至極に存じ候へ共軍命令の致す處致し方なく只亡き戰友の武勲を讃へ英靈の冥福を祈り居候。家は燒かれ追はれて家なし喰ふに食なき敗戰國を如實に見皇國の有難さに感激の新なるを覺へ居り申候。同窓小林忠十郎君も同○隊はて勇躍仕り居り候。先は近況御通知迄。

（一月七日、校長宛）

野田太郎氏より

賀正、愈々御健勝で御越年なされし事と存じます。降而私も御蔭様で大元氣にて陣中で越年致しました。舊年中は公私共種々御配慮に預り厚く感謝致します。今後共何卒宜敷御指導御鞭撻の程願ひます。目下吾々は第一線に立つてはゐます、北支出動當時は京漢線沿線の某地に居ましたが正月六日北支山嶽地帶○○地に向け出發漸く難路六○餘里の行軍も一同大元氣にて終り過日到着致しました。目下の處では朝鮮平壌附近の氣温よりも大部暖く見られます。河巾の實に廣い小川が附近に流れ町の家々も未だに空家が大部分の譯です。何れ日を追ひ愈々充實して來るものと思ひます。北支出動以來今日は初めて雪を見て居ます。目下パラ〳〵降つてゐます。野戰で詳細も御通報出來ず通信も中々致しかねる御無沙汰勝になつてゐますが諸先生方々にも御閑暇の時に何卒宜敷く御傳への程願ひます。

（一月十九日、校長宛）

藤澤喜一郎氏より

出征以來御無沙汰致し失禮致しました上陸後全く通信の便なく去る十一月○○日杭州灣の一角に至難なる敵前上陸を敢行致し之に成功し爾來深藪錯雜し泥濘脚を沒する惡路を神速なる機動を以つて隨所に堅壘を擊碎し上海周邊に頑强に抵抗する敵大軍の側背に迫り之れを潰滅せしめて湖東會戰に快勝し更に疾風迅雷的に急追猛擊を續け十二月十二日遂に敵國の首都南京を攻略して歴史的壯擧を完成し直ちに轉戰旬日を出でずして中支の重要都市杭州を陷れました。斯くして吾人は皇軍の威武を世界に顯揚し昭和十三年の新春を平穩に中支の都胡洲に迎へ得る事が出來喜んで居ります。今後の任務は速かに支那良民と共に日支親善を圖り東洋の平和を確保するにあるのみ。近き日に完成する事を誓ふのみ。

（校長宛）

慰問袋に對する禮狀

岡宮辰雄君（蠶選三學生）より

時下向寒の候益々御清祥の段慶賀に存じます。陳者小生其後御無音に打過ぎ誠に申譯御座いません。目下信州もいと御寒き事に御座いませう。而して學期末を目前に益々御多忙の事と御推察申上げます。就いては昨日御手紙及御慰問袋等正に御受致しました。誠に野戰に踏入つて以來内地からの慰問品は初めてに且懷かしき母校からと云ふ事になれば誠に小生目頭の熱くなる様な嬉しさで胸が一杯でした。開荷する時の嬉しさも又何とも申上げ様のない樂しみでした。丁度舌切雀の物語の様に開くのが樂しみです。開ひて見ても色々と我々の必要品のみにて大變嬉しう御座いました。厚く御禮申上げます。有難う御座いました。扨て我々は既に皆様の御承知の様に塘沽に上陸以來郎坊、天津、豐台等當時の戰績を見物行軍致し第一線に近く前進し盧溝橋をすぎ良鄕へ向つて後は眞に第一線への命令は下された。途中野戰重砲の砲列勇ましく大地もゆらぐ砲彈の音だ。而して大雷雨下の水滯れの戰闘や泥濘踏込んでは足をぬかれ馬は落ち食に缺しては生芋大根栗等も美味く舌打ちし事か。而して保定に入城、而して石家莊、順德更に彰德、大名と追擊し追擊二百數十里の追擊戰爭は之だ。誠に皇軍でなくては見られぬ事だ。敵を分つて追擊し我軍の後に敵退却し來る等敵退散の狀、實に之だ。手榴彈は無數に放棄し捨て自動車は置去る。然して屍體や負傷者は勿論野邊に横たはる等は實に哀れです。然して黄河近くの北支の空は實に大陸的氣候にて夜は寒く城外の堀は氷結し一望千里棉畑、高粱の畑、枯立す。幹も誠に向寒を思はす。廣漠地平線に沈む赫々たる太陽もいと紅からに寒風を誘ふ。而して只今では邯鄲や磁縣等皆警備體制にて駐屯して居る有様で御座います。大方戰火も下火と云へませう。部落には土民は入り賑かになりました。然し時々夜半にてパチ〳〵彈の音は致します。油斷は出來ませんね。敗殘兵の多き事。第二十一回の手塚達郎様、第十二回の淺沼袈裟男様等にも時々會ひますが皆元氣です。又我〇隊へは二十三回の山口君等も見へ毎日の様に語り合ふ等心强く實に樂みな物で御座います。就ては小生も西保障で負傷して後は約一ケ月にして退院只今は全く健全にて元氣旺盛軍務に精勵致して居ります。先は皆様も時節柄御身大切に。小生も益精勵致す覺悟で御座います。では之れで失禮申上ます。

（十二月一日、千曲會宛）

手塚達郎氏より

愈々嚴寒の候と成つて參りました。校長先生には其後益々御健勝の由深く御喜び申上ます。扨て過日は結構なる御慰問狀を下され又今度は不肖に迄態々御慰問品の數々を賜りまして厚く銃後に活躍される皆様の御同情に感謝してゐます。完全なる包裝で異狀もなく品々何れも有り難く頂きました。戰友と共に御菓子は頂きました。もう中に入つて來た婦人俱樂部雜誌は皆で引張り凧で仲々自分の讀む時もありません位です。實は十月三十日付で慰問品を御送り下さつた由手紙で知りましたので十二月になつてからは毎日今日か明日かと樂しみにして待つて居た次第です。十一日に邯鄲の西方八、九里の所に在る武安と云ふ所（大きな良い町でした）まで宣撫行軍に行つて參りました。途中至る所で支那人の振る日章旗に又投降する支那軍隊の歡迎ラッパにすつかり疲れも忘れる位でした。その夜は縣政府の招待を受けて〇〇以上宴會に列しましたが何しろ進められる品々何れも油つこい物許りで折角彼等の一生懸命で作つて出して與れたものですが甚だ誰も不得手の様子でした。何しろ此の町は未だ支那軍隊に一度も荒されてゐないので私も支那へ來てから初めて此の様な綺麗な町を見た所です。それに附近の住民が大抵避難して來てゐて町の賑かさは素晴らしいものです。此の町に入城する時はもう町中の人が飛び出して來て城門の兩側にズラりと並び手に〳〵日章旗を振りつゝ大歡迎でした。先頭に立つて堂々入城する〇〇長殿の得意や思ふべしであります。疲れも忘れ果てた様に一同歩調を揃へて歩武も堂々と勇ましく入城したものでした。翌日歸つて邯鄲に來ました。留守中にその慰問袋が屆いたのでした。十五日は南京陷落で町中日の丸の旗で飾り付けられて大祝賀會を開き大騒ぎでした。支那人も喜び様大したもので得意の足長踊りも出ました。愈々明朗なる北支建設も間近に迫つた様に思はれます。最近少しく戰闘もなく偶々夜襲がある程度です。〇〇日には彰德に前進します。そしてそこで年越でせう。今準備で大多忙です。今日は郵便物受領や某地の公用連絡の爲め磁縣に來てゐます。愈々内地も御正月ですね。戰地では正月も蹴飛ばしです。それでは寒さも激しい折柄充分御身體御注意遊ばされん事をはるかに北支の空の方から祈つて居ります。乍末筆御一同様に宜しく御傳聲下さい。猶小生元氣にて毎日多忙に飛び廻つてゐます故乍他事御安心下さい。先は御禮旁々近況まで。

（十二月十九日、校長宛）

百瀨文雄氏より

木の葉も落盡し風に粉雪舞ふ北支の冬も漸く深まつて來ました。全く永らく御無音に打過ぎ眞に申譯御座いません。それにも拘らず過日は御書面に接し本日は慰問文にかてゝ加へて結構なる慰問品多數御送り下され有難く厚く御禮申上げます。母校の皆々樣日々多忙なる傍ら銃後の守りに御精勵なされて居られる由重々御禮申上げます。降つて小生出征以來元氣に滿ちて軍務に努めて居りますから何卒他事乍ら御休心下さい。保定城を手に入れて以來、吾が道山部隊は平漢線を南に〳〵河南省彰德に入つたのは十一月五日でした。それより直ちに引返へし〇〇から〇〇へそして邯鄲へ只今當地に止まり、邯鄲及其の附近の警備に當つて居ります、其の間一日十餘里の行軍も道の無い打續く棉畠の中の行軍も膝迄入るぬかるみの中の行軍も又生茄子や生芋で食事を取つた行軍も今は全く夢の如く目の前にチラツイて居ります。昨日も暖かき防寒帽で河南省武安に治安維持を目的に十六里の行軍をして來ましたが武安も非常に平定されて居り日章旗で自分等を迎へて呉れました。では取り敢ず御禮迄。皆々樣によろしく御傳へ下さい。

（十二月十五日、校長宛）

松崎武雄氏より

謹みて年頭年末の賀詞陣中より申上げます。北支の風雲急を告げるや遂に〇月〇〇日待ちに待つたる〇〇下り直ちに〇〇日〇〇を後に電信〇隊の〇隊長の〇職を奉じ前進又前進現在山東省〇〇の地に待機致して居ります。過去四ケ月を回顧する時當初は敵も頑强なる防禦陣地を構築し到る處の民家は極度に荒され人影なく唯見るは累々たる屍のみ如何に抵抗せるかゞ想像されしも前進するにつれ陣地と云ふ陣地もなく部落には大半土民居住し各戸に日の丸を掲げ日軍の來るを大いに歡迎し野良にも喜々として働く百姓の姿を見受けられ皇軍の使命の着々として達せられあるを如實に見せつけられます。時には飲むに水なく食ふに食なき時もありましたが現今は支那の水にも慣れ後方連絡も完全になり時には久し振りに内地酒に舌鼓を鳴らすこともあります。これ偏へに銃後各位の御努力の賜と深く感謝致して居ります。今般は不肖私等の様な者に迄誠に結構なる慰問袋を御送り下され唯々感涙の外なく有難く頂戴致しました。尚御激勵の御便り迄拜受益々責務の重且大なるを痛感御期待に添ふべく奮勵努力皇軍の使命に向ひ邁進致します。山東省は割合に暖く雪なく氷が厚く張りつめて居る丈です。氣分のせいか上田の冬よりは餘程暖い様に感じます。御蔭様を以つて出征以來身壯健微力を捧げて居りますから乍他事御休神下さい。末筆ながら校長先生を初め御一統様の御健康御奮闘を祈り御厚禮申上げます。

（十二月十九日、學校宛）

坂口芳文氏より

嚴寒の砌り校長先生には益々御壯健の御事と拜察申し上げます。先日は御鄭重なる御慰問の御便り又今日は結構なる御進物頂戴致しまして眞に有難く厚く御禮申上げます。私は蠶絲科二十一回卒（熊本縣人）坂口芳文でありますが去る〇月〇〇日〇〇〇〇〇に入隊致しまして〇〇〇〇〇〇〇〇隊として〇月二十八日より今日まで（十二月二十一日）呉淞で軍務に精を出しております。二ケ月此の地で働きまして愈々〇〇日より南京の西北徐州に行く事になつております。只今荷物の整理で大騷ぎしてゐる様な有様で亂雜何卒御許し下さいませ。當地及上海は既に平和の地に返つたとは言へ浦東或は七浦等々とあちこちに支那遊撃隊があらはれるとの注意があり油斷はなりません。上陸した當時は私達後方勤務の者も毎晩支那の飛行機の夜襲を受けたものでしたが只今は全くのんびりしたもので吾が友軍の飛行機の空中サーカスでも見る位のものです。既に南京も陷落したし後方の者は戰爭に來てゐるのだろうかと考へる程です。しかし二三日後には〇〇の方へ移動しますれば又生々しい何等か見物されるものと思ひます。とりとめもない事許り書きましたが何卒御許し下さいませ。時節柄先生には益々御體を御大切になさいませ。

（十二月二十一日、校長宛）

桐本他喜男氏より

正月を目前にひかへ内地に於いても寒さはかなり强くなつたものと思はれます。御一同様には御變りは有りませんですか御伺ひ申し上げます。小生出征以來甚だ元氣にて軍務に全力をつくして居りますから御安心下さい。本日は結構なる御慰問の品々を御送り下さいまして感謝して居ります。五十里にわたる軍用〇〇連絡の任務をおびて張家口に〇〇を置いて活躍して居ります。擔任區域の中には事變で有名な南江鎭、居庸關があり戰闘中に無理してかけた電線を半永久的なものに仕上げて居る譯であります。第一線は既に戰闘を中止して居る所もありますが私等の任務は此れからと云ふわけです。張家口は現在人口八万ばかりあります。日本人は毎日汽車がつく毎に增加するばかりです。旅の恥はかき捨て式の日本人の時に見られるのは支那人に對して指導的地位にあらねばならぬと思ふと情無い氣持になります。兵舍は元廿九軍幹部學校の跡を利用して居ます。學校とは名ばかりの土で出來た粗末なものですが南江附近の激戰當時の戰闘部隊の勞苦を思へば玉樓にも相當するものです。町の中央から二粁ばかりはなれて居ります。毎日好天氣ばかりで仕事には大變に都合が良いですが水不足には閉口して居ります。井戸一個で〇〇名の兵と〇〇[illegible]ますが其井戸も二十五米の深さです。最初は心配しましたがど[illegible]す。寒さは大變に强く[illegible]を過した時は其寒さに[illegible]は上田の比ではありま[illegible]下十度－二十度の寒さ[illegible]痛いと云つた方が相當[illegible]外で三十分位立つて居[illegible]凍つて無理して取つた[illegible]北支方面は治安維持さ[illegible]れて居ますが日本軍[illegible]産黨が入込んで居るか[illegible]いふ命令があつた位で[illegible]も出來ません。便衣の[illegible]つて居る様です。日本[illegible]常に敗殘兵の土匪化し[illegible]に困つて居る様です。[illegible]夜中にでも出動した時[illegible]は殆んどありません。[illegible]跡を見ると未だ白骨が[illegible]荒らされ村民の我々の[illegible]頭を下げる様子を見た[illegible]じて生れた喜びと共に[illegible]と駄目だといふ事が痛[illegible]ます。此方の様子を何[illegible]らせした譯です。恐ら[illegible]に屆くのは正月すぎて[illegible]御健康と御多幸を祈り[illegible]樣にもよろしく御傳へ下さい。

（十二月廿七日、校長宛）

百瀬　正氏より

嚴寒の候皆々樣益々[illegible]らるゝ事慶賀に存候。[illegible]並に御慰問品の御送附[illegible]厚く〳〵御禮申上候。[illegible]に惠まれ連戰連勝たり[illegible]が銃後にて御後援下さ[illegible]よりの新聞を拜見して[illegible]後の）見ますと自然に[illegible]疲勞せる脚も躍り出る[illegible]軍が續行せられ候。私[illegible]ら敵對行動を取り河川[illegible]兵の仕事も架橋が主に[illegible]栅河の敵前渡河又はそ[illegible]後小さな架橋は數多有[illegible]本式の永久木橋を恒河[illegible]て完成聖德橋と命名お[illegible]優秀橋と思はれ候。彰[illegible]進し大名に至りても彌[illegible]十二月十二、十三日戰[illegible]り御知らせ致し候も十[illegible]の因も我が岩倉部隊の[illegible]橋に爆破が主なる任務[illegible]闘終りて再び彰德への[illegible]衛河畔龍王廟出發寒氣[illegible]

の連續行軍二十五日懐しの彰德到着當夜母校よりの小包が到着疲れた脚も速座に回復戰友と共に頂き內地の珍品を賞味致し候。先は書面を以て不取敢右御禮申上候。時節向寒の折益々御自愛御專一の程御祈り申上候。（十二月廿七日、校長他一同宛）

山本辰雄氏より

御手紙拜見致しました。御鄭重なる慰問袋を御送附被下有難う御座いました。早速御禮申上ぐべき所多忙に紛れ失禮を重ね申譯有りません。北支の戰地で受取つたならさぞかし感一入深かつた事であらうと考へ殘念に思ひました。唯內地の留守隊に殘され第一線に活躍して居る戰友を思ふ時慰問袋が勿體なく思はれました。此上は緊褌一番皆樣の御期待に副ふ樣又第一線の戰友に劣らぬ樣軍務に精勵致す決心でありますから御安心下さい。懐しの上田も早や雪景色に化した事でせう。夢に時々ありし日を思ひ出し懐しく存じます。先は御禮旁々近況御報告迄。（十二月三十日、千曲會宛）

有我彰夫氏より

聖戰に征で、此處に半歲中支鎭江城に輝かしき昭和十三年を迎へ謹みて新年の御祝詞申上候。舊年中は格別の御厚情に接し取分け銃後の熱誠なる御厚援に預り且又心からなる御慰問の品迄頂戴致し厚く／＼御禮申上候。戰地の元旦、東面して揚子江上遙に昇る旭光を拜し皇居を遙拜　大元帥陛下の萬歲を三唱し奉り感激に充ちたる意義深き正月を迎へ候。思ひ出せば昨年の夏炎熱燒くが如き中の上海附近の戰鬪續いて長驅南京攻擊のあの激戰も彼の十二月十七日の歷史的首都入城式を一期に今は夢の如く過ぎ去り燒野原と化して居た戰場も次第に支那良民の立歸る所となり戶每に日の丸の旗を揭げ營々として復興の途を辿り手近な所からさゝやかなる自活の道を立て始め候。併し乍ら見るからにいと憐なる亡國の民の姿にして之に引き替へ滲み／＼と帝國に生をうけし身の有難さを感じ入り候。今や國威四海に輝き東洋永遠の平和の礎又日に堅きを加へんとするを思ひ遙か異境の空に躍進日本の姿を拜し感慨又無量のもの有之候。先は右新年の御祝詞旁々御禮申上候。乍末筆遙に校長先生の御健康を祈り併せて千曲會の發展隆昌祈上候。（一月一日、校長宛）

酒井淳夫氏より

恩師並に同窓生學生各位新年御目出度う御座います。御加護により不肖朔風すさぶ北支の一角に意氣軒昂新春を迎え得ました。出征以來の御無沙汰を謝しますと共に銃後の御熱誠に對し厚く御禮申上ます。本日は又御厚意の慰問品賜り感激致して居ります。私達の命を挺身事にあたる此の意氣を持つて多難なる前途を克服いたします。皆樣の健康と母校の隆盛を祈上ます。右御禮旁々新年の御挨拶まで。（一月一日、學校宛）

林十郎氏より

謹みて新春を賀し奉り候。十二月十日付の御芳書並御心盡しの慰問品有難く拜受仕り候。校長先生外皆々樣寒氣嚴しき折愈々御健勝に涉らせ洵に慶賀の至りに存じ奉り候。降而私も出征以來至極壯健にて數回の戰鬪に參加致し元氣にて活動致し居り候間御放念被下度候。皇軍の進むところ連戰連勝上海落ち首都南京落ち北支の天地又明朗なる新政權生れ御同慶の至りに存じ奉り候。之れ一に　天皇陛下の御稜威の然らしむる處に御座候。然し乍ら日本に對する諸外國の情勢等を考處する時は前途猶多難なるものあり私共軍人は勿論日本國民一致協力正義の爲め益々一大決心を以つて臨まざる可からずと存じ候。軍籍に身を置く私も校長先生並諸先生皆々樣の日頃御鞭撻下されし御教訓を守り母校の爲め恥しからざる本分を盡し度き覺悟に御座候。時下向寒の折益々御多祥に涉らせらるゝ樣御自愛の程祈り奉り候。右御禮迄に申上げ度く如斯に御座候。（一月一日、校長他一同宛）

後藤政之氏より

恭賀新年。遠く南支の陣中より貴家の萬福を祈り上候。御丁寧なる御慰文頂き有難存候並に結構な品頂戴仕り遠く信州の空を眺めてひたすら感謝仕り候。（元旦、校長宛）

村瀬益男氏より

有難き御慰問狀御慰問袋御慰問金本當に嬉しく拜受致しました。厚く／＼御禮申上げます。扨て小生出征以來至極元氣で軍務に精勵致して居りますれば何卒御休心下さい。誠に失禮では御座いますが御書面を以て御禮の言葉に變へます。（一月九日、學校宛）

藤本齊氏より

前文御免被下度候。母校校長先生を始め御一同樣愈々御淸榮奉賀候。御蔭樣にて小生無事北支にて軍務に努め居り候間御休神被下度候。次に先般は御鄭重なる慰問品御送付被下確に受納班一同にて分配共に嬉しさを等分致し申候。直に御禮狀を差上ぐべく認め置候も內容不備の點有之取上られずその後行軍途上にてその機會無之今日まで延引と相成候。失禮重々御容謝被下度右御禮まで。（一月十二日、千曲會宛）

上木忠士氏より

酷寒の砌母校益々御多祥の段大慶の至りに存じます。本日確かに慰問小包拜受しました。出征に當りて日夜陰に陽に眞心こめた御後援を賜りし上に今又かくも立派な小包を頂く等全く御芳情身に泌みて有難く唯々深謝の外ありません。御蔭で元氣旺盛無事御奉公致して居ますから何とぞ御放念下さい。御送り下されし母校製作の靴下殊の外懷しく在校中實習で製作せし事を思ひ出して學窓三ケ年を回想して感慨無量です。又長い間で讀む新聞長野版「愛國叢書號」とか「北信だより」等隅から隅まで懷しく讀みました。其他數々の品でどれもこれも皆有難きもの許りで厚く／＼御禮申上げます。兎角目下小生等宿營中の太原は地勢氣候共によく似て學窓三ケ年の御訓育どんなに役に立つかしれません。只此の太原は信州上田より少々寒い位が異つてゐるのみで土地は乾燥し連日晴天で曇天の日すら珍しい程です。又似れば似るもので公開まで風景が似て連日可愛い姿の支那小供達が喜んでスケートをやつてゐます。中には日本兵が子供に手を引かせて滑つてゐる等おだやかな風景を展開して居ます。又一方町も日に日に交通繁くなり食堂ホテル旅館カフェー寫眞店時計店等次から次へと店も出來て日每に便利になつてきました。もう立派な町として復舊されることも遠くはない事でせう。今胸に手を當てゝ北支に來てよりの事を回想して見ますに銃後の皆樣の偉大な且莫大な仕事に對して小生のなせし仕事の余りにも小なるに恥しくなります。母校の名を擧げ又母校の御恩に報ゆるは今が絕好のチヤンスであると信じてゐるのです。零下何十度の寒さも何百里の行軍も不眠不休の銃後の皆樣の御後援に對しては何物でもありません。今後は一層粉骨碎身して惡道非道の支那軍閥を徹頭徹尾膺懲して御奉公の誠を果し以て母校皆樣の御恩の萬分の一にでも報び度き覺悟につき何分今後共宜敷く御願ひします。先は御厚禮まで。（一月十三日、千曲會校友會宛）

山口悠紀男氏より

謹みて新年を奉賀候。會員御一同樣には希望多き迎春の御事さぞかしと拜察申上候。陳者過月は御親書に接し且御鄭重にも慰問品迄御惠送被下御厚志誠に難有奉深謝候。御蔭を以て無事奮鬪致居候間乍他事御放心被下度候。小生等先月下旬一炊の夢邯鄲を後に炭山守備の命を以て平漢線彰德を距る約六里○○地に移動仕候。最前線の事とて入城の折は敗殘兵約八百城內固く鎭し頑强に抵抗致す可く謀り居り候得共我○○砲四門當隊○○砲二門の猛擊に堪へかねて西南方山嶽地に敗走致候。我には一名の負傷者無之意氣衝天土民等の大歡迎裡に堂々入城仕り候。然るに又々最近に至り當城を包圍攻擊の隊制に敗陣し萬福麟麾下四川軍續々集結中にて當城奪還を目論みつゝある現況に御座候。當隊更に南下し此等殘敵を掃蕩致す可く現在の處待期中に有之候。南支○○○地にて戰地の思出多き新春を迎ふるに當り世界に冠絕せる我皇軍の連戰連勝を思ふ時其の御蔭に感激措く能はざる銃後の皆々樣の御熱誠有之此が萬分の一にも報恩致度一層奮勵任務遂行に邁進致す覺悟に御座候。先は新春の賀詞旁々御禮迄如斯御座候。（一月十五日、千曲會員一同宛）

鈴木力氏より

寒冷の折柄貴會益々御多祥の段奉賀候。十二月十九日○○○より○○渡河の爲め行軍前進の途御送付の慰問袋有難く拜受仕り候。幾日か續いた行軍の疲れも一度に解消同窓生各位の御親切に感泣懷しい故國に想ひを馳せ戰友にも別け與へながら糖分の缺乏を補ひ休憩の度に雜誌を開き前進を續け中候。十一月末以來各地に轉戰一地に駐屯する事無之候間早速御返事仕る可きに意外の延引と相成候が惡しからず御容謝被下度候。次に愚生出征以來至極頑健にて第一線勤務に服し最近は世界戰史に未だ見ずとの○○渡河戰に最前戰に立ちその後も○○城攻擊に參加渡支以來の目標を奪取引續き追擊に／＼を加へ○進中に有之候。○○行動の報導は○○され居り候へば精細御報知出來ざるを殘念に存候。新聞ラヂオ等にて御推察の程願上候。○○によると相當多勢の方が第一線に御立ちの樣子にて心强く存居り候。當隊には愚生一名のみにて當方面には紡士の近藤君が居る模樣に候も未だ對面の機を得申さず殘念に存じ居候。產業第一線に御立ち遊ばさる同窓生各位にも事變の進展と共に益々御多忙御辛苦の御事と遙に御推察御健鬪の程祈上候。軍務多忙にて校長先生初め諸先生先輩各位に御無沙汰致し居候が何れ暇を得次第御便り仕る積りに候へば何卒よろしく御傳言被下度願上候。末筆乍ら會員各位の御自愛專一祈上候。先は延引ながら御禮迄。（一月十五日、千曲會宛）

御子柴義之氏より

此の間は御鄭重なる慰問狀並に慰問品有難う御座いました。厚く御禮申上げます。新年お目出度う存じます。皆々樣益々御健勝の事と異鄕の地より拜察申し居ります。御激勵を浴びて勇躍征途に上りましてより既に四ケ月其の間上海に上陸し先進輜重として名譽ある南京攻略に參加し野に寢ね山に伏し難路に加ふるに强行軍幾多の兵馬を犧牲にしつゝ其任務を全うし十二月末に元氣で只今滯在中の湖州に參りました。是偏に皆樣の御援助御激勵の賜と感謝に堪へません。隨分難苦を嘗めましたがこうした苦心こそ皇國の爲めだ皆樣に報ゆる事が出來る事だと思へば苦しみも苦しみとせず嚴寒にも血潮の躍動を禁じ得ませんでした。南京の陷落後當地に來まして第○○○警備隊への糧秣輸送に當つて居りますが次の作戰に待機益々緊張してゐる次第です。其後種々なる勤務に忙殺されて居りますが身體の調子は絕好です。この身體と話を種に再び皆樣にお目にかゝりたいと念じて居ります。湖州は便利よく十日餘で通信出來る樣になり恰度故國に近づいた樣な嬉しさを覺えます。是迄は全く非の中の蛙同樣でした。隨つて御無沙汰致して居りました事を御詫び申上げます。當地は恰度春らしい氣候ですが御地は却つて寒さが加はつて來る事と存じます。皆樣の御健康を異國の地より御祈り申して居ります。皆々樣によろしくお傳へ下さる樣先は御伺まで。（一月十七日、校長諸先生宛）

清水洸氏より

陣者今般は御鄭重なる慰問袋御送り下され衷心より厚く御禮を申上げます。皆樣の御心づくしに對しては唯感激の外は御座いません。何卒宜敷く御願ひ申上げます。先は右亂筆ながら取り敢へず御禮まで申上げます。（一月十一日、校長宛）

時下嚴冬の候益々御淸榮の段奉賀候。陳者今般は御鄭重なる慰問袋御送り下され衷心より深謝し奉り候。御送り下されし御品々は眞に皆樣の熱誠あふるゝ眞心の結晶に御座候へば最も有效に使用致す覺悟に候。次に私事出征以來既に三ケ月以上を經過致候へ共其間何等特筆すべき事を爲す事もなく今日に至りたるにも拘らず皆樣には厚き御同情を給はり恐縮に存ずる次第に御座候。今後は一層努力致し上田蠶絲專門學校の卒業生として恥しからぬ樣全力を盡す覺悟に御座候。今やの地も全く治安回復致し殊に租界內にはく戰禍を知らざるが如く[illegible]座候。當地は氣溫內地に比し著しく高く既にたんぽゝの開花を見る程に有之候。先は右御禮旁々近況御知らせまで申上度如斯御座候。（一月十二日、校長宛）

小林忠十郎氏夫人 竹江氏より

極寒の砌御校益々御發展の程御喜び申上げます。過般は主人（小林忠十郎）出征後御校よりは慰問の御品御惠送下さいました由厚く御禮申上げます。先日本月六日附戰地よりの便りに依りますと正月を長興に迎へまして只今も其所の警備に當つて居ります趣にございます。元氣にて任務につとめて居ります事をよろしく御校に傳言申上げる樣また御無沙汰勝にてます事をおわび申上げる樣と本人より申して參りました。何卒お含み下さいませ。憚り乍ら一言御禮に併せまして御報せまで。（一月廿五日、千曲會宛）

笠原松平氏より

一口に戰爭の樣と申しますが戰地に來てつく／＼此れが戰爭かと思はせる事が多く食料の缺乏長い行軍爲に疲る事と食ふ事の外考へる餘裕がなく支那人に似て來ました。慰問袋を戴き此の上も無く喜び小供の樣です。只今では一地に居り輸送致して居り稍々樂になつて來ました。亂筆にて御禮旁々御一報まで。（學校宛）

訃報

御逝去通知

本會會員　榊原敏男氏（蠶十九）

朝鮮京畿道蠶業取締所在勤の同氏は病の爲め客歲歸鄉せられ專ら療養中の處養生相叶はず去る一月四日遂に逝去せらる。洵に痛惜の至りに堪へず。謹みて哀悼の意を表す。御遺族は岡崎市康生町、御令兄榊原嘉一郎氏である。

弔慰金募集

故増田孝氏（蠶十一）
故村田孝男氏（蠶十三）
故飯田喜雄氏（紡十四）
故榊原敏男氏（蠶十九）

右四氏に對し弔慰金募集致します

故増田氏並に故村田氏は二月末日、故榊原氏は四月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致し度いと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座東京四三四一番へ夫々故人の弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。

昭和十三年二月

千曲會

弔慰金報告

故稻生得三氏弔慰金第四回
金五圓也　池田正五郎
金壹圓也　長谷川正雄、佐藤義助
湯澤重敬、松谷鐵之助
右合計金九圓也
累計金壹百貳拾四圓也

故依田彌寛氏弔慰金七回
金壹圓也　今村良郷
累計金八拾五圓五拾錢也

故増田孝氏弔慰金第二回
金五圓也　池田正五郎
金貳圓也　佐藤義助
金壹圓五拾錢也　水城孝勇、古川俊之
金壹圓也　長谷川正雄、今村良郷
右合計金拾貳圓也
累計金拾八圓也

故村田孝男氏弔慰金第一回
金貳圓也　本橋万三郎
金壹圓也　今村良郷、兒玉來衛
鈴木泰一、原田兵
右合計金六圓也

故榊原敏男氏弔慰金第一回
金貳圓也　加藤省三
金壹圓也　工藤實司
右合計金九圓也

故飯田喜雄氏弔慰金第一回
金壹圓也　鈴木正一郎、香山清和
金野口新太郎、小松忠一郎
右金四圓也

鈴木教吾氏よりの禮狀

肅啓　今般父周吉逝去に際しては早速御鄭重なる弔電を賜はり誠に難有厚く御禮申上候、以御蔭本日午後二時出棺無滯野邊送り相濟ませ候間乍憚御放念被成下度候、右不取敢以書中御禮旁々御挨拶迄如斯に御座候

昭和十三年一月二十日

福島縣田村郡小野新町　鈴木敬吾

千曲會宛

佐藤義助氏よりの禮狀

謹啓　父尾之七葬送の節は御鄭重なる御弔慰を辱ふし御厚情の程衷心感銘仕候、先は不取敢御禮迄如斯御座候

昭和十三年二月五日　敬白

小縣郡鹽尻村　佐藤義助

飯田喜雄君の死を悼む

香山清和

それは昭和十年七月末と思ふ。學生の校外實習先廻りの出張で名古屋、靜岡、横濱、東京、足利と廻つて最後に桐生へ來た時は祇園祭とやらで町の眞中へ屋台を組んで大騒ぎであつた。こんな風では兩毛製織も休みでは無いかと心配し乍ら行つて見たら案の定工場は休みお偉い人々は誰も出勤して居ないと云ふ譯だ。就職依頼と違つてお偉い人に是非會はねばならぬ必要も無いので事務の人に傳言を依頼し辭したが折角此處迄來て之れ丈で歸るとはと何んと無く物足りなく考へる內ふと君に會つて行く氣になり門衞に場所を敎はり君の合宿所へ訪ねて行つた。君は四月以來兩毛製織へ勤めてゐたのである。折よく君は居て會つたが大變弱つてゐる樣なので「どうした」と尋ねたら「腹をこわして一月位前から休んでゐる」と云ふ事なので「大事にしなくてはいけない」と云つて歸つたが君の死はこの時から關係がある樣に思へてならない。それから數ケ月後君は肋膜炎と腹膜炎とかで故山で靜養してゐると聞き一日も早く全快するのを祈つてゐた。それも十一年の七月頃には殆んど全快されて學校へ就職を依頼して來る樣になつたと聞いてよくあれ丈の病氣が癒つたなあと思つてゐた。九月になつて丁度人絹研究室に席が空いたので君が來る事になつた。來た當時の樣子は長い病氣生活の爲め頭髪は薄くなり顏色も惡く聲も元氣無く總ての動作が弱々しく見えた。然るに學校へ來てから日を經るに從ひ元氣よくなり頬にも幾らか紅調を帶びる樣になりテニスも少しはやる碁も打つ尺八も吹くと云ふ樣になつた。高女職員との野球試合には僕と組んで出場した事もあつた。斯くの如く日增しに元氣よくなつたが依然腸はよくないらしく時々腸を壞したとかで休む事があつた。其の後蠶絲總覽の方に缺員が出來、その方が收入も多いので蠶絲總覽の方へ轉じたがやはり人絹の味は忘れられないらしく日暇の時には手傳ひに來てもなつた譯だ。七月末になつてどうも腹具合がよくないから歸鄉してみつちり靜養して來ると云ふて歸つたのがそれつ切りになつてしまつた。○月下旬には皮肉にもその病人の君の處へ○○令狀が來てしつかりやつて來ますとか何んとか云つて上田から母校職員多數の見送りを受けて出發したそうだが（すぐ免除になつて歸されたが）その時には僕は出張中だつたので面會出來なかつた。それつ切り夏休が濟んでも君は學校へは出て來なかつた。十一月頃君から「時報が來ませんが、病床に居る者はそれを見るのが唯一の樂しみで」との葉書を受取り申譯無く思ひ早速送つてやつた。それが君からの最後の通信ともなつた。それから間も無く學校の二、三の人に宛てゝ父上から十二月十九日に君が死んだと云ふ通知に接し吃驚したのである。まさか死ぬ程の重態とは思つて居なかつた。明春にでもなればまた君の溫顏が見える位に考へてゐたのであつたから全く驚いてしまつた。

君は南安曇郡溫村の生れで松本中學の出身本校は昭和十年第十四回紡織科の卒業で學生中には野球の名マネージャーであつた事を記憶してゐる。そして生徒としては最も柔順なすなほな人當りのよい生徒であつた樣に記憶してゐる。人絹へ勤める樣になつてからも時々色々な仕事を頼んだが心よく速かにやつて呉れた。僕も多くの人に接した君位人の云ふ通りになり思ふ通りに動いて呉れた人は少なかつた樣に思ふ。却々人の云ふ事を聽か無い常に何事にも一言なかるべからずの信州人には君は一寸型破りであつた。それ丈心も身體も弱い樣に見えた。學校へ勤める樣になつてからは病氣のせいもあつたが特にそんな風に見えた。何んとなく老人くさく見え青年の覇氣と云ふものが見えなかつた樣だ。そして柔順な君は死の神の命にも抗する事を得ず柔順に死んで行つた事であらう。

寒風吹き荒ぶ六日の夜炬燵にあたりて在りし君の面影を頭に畫きつゝ此の文を認む。今は所を異にし再び相見るを得ざる君よ。安らかに眠れ。

級友飯田兄を憶ふ

尾洲敞史

飯田が亡くなつた。本當に夢のやうだ。この六月末に一寸會つた時には未だ完全にはならないが段々良くなつてゐると苦しかつた生活を思ひ出すやうに語つた。此の○月に○○を受けたが即時歸國との事を九月半になつて知らせて來た。それから白骨溫泉とかに行つたが其處で亦體を惡くして歸宅してしまつた、それからズツト病床に在るなんて云つて來た。十一月になつたらもう筆もとる事が苦しいやうな事を云つて來た。十一月半頃に來たのが遂に最後の便りになつてしまつた。死ぬほど惡いとは思はなかつた。併し死んでしまつたのだ。この十九日に遂々死んでしまつた。二十一日に氏の御尊父樣から通知を受取つて呆然としてしまつた。若くして逝つた級友を憶ひ多端なりし九七年を思出しながら氏との過ぎし生活を胸に浮べてみる。

修已寮の八號室からボーと萠え出たばかりのポプラの芽を眺めてゐたら一人の男がトランクをさげて入つて來た。それが飯田だつた。丁度同室には河村君も居り紡績科は都合三人だつた。その時に話し合つたのが始めだつた。氣が合ふのか遂々喧嘩友達になつてしまつた。「細井」君から「細井」へ、それから「細」と名前も節約されてしまつた。「馬鹿野郎」「貴樣」「俺」「おい」—それ等の言葉が惡感情を抱かせず云へ亦受け入れられない中は友達としてどうもピッタリ來ない氣がする。

兎も角もクラスの中で一番自由に話し得る事の出來たのは飯田だつたと思ふ。それ丈亦喧嘩をしても來たんだ。

一年生の四月の半ばだつたと思ふ。飯田が風邪氣味で寢てゐた。頓服を買つて來て呉れとの事だつたので湊新で買つて來た。それから手拭をしぼつて來て頭に載せてやつたりした事がある。あれからグツト親密が增したやうな氣がする。

それからこんな事も有つた。初夏の一寸蒸し暑さを感ずる晩だ。夕飯を濟まして部屋に歸へり硝子戸を開けた。すると飯田が來て默つて閉めた。暑かつたので俺が開けた。飯田が閉めた。そんな事を二三度する中に遂々本氣になつて怒つてしまつた。それから一週間位お互に口をきかなかつた。同室に居つて親しかつた者が口をきかぬ事は苦しかつた。實際苦しいものだ。で遂々俺が負けてしまつた。

なんでもその晩、仲直りのために鹽川で蜜豆を喰べ合つたやうな氣がする。强情な負嫌ひな男だとつく〳〵感心した。

飯田の理想は偉大なる平凡人になる事だつた。大會社の重役になる事だつた。偉大なる文學者になる事だつた。併し最初の項は兎も角も後の二つは到頭成れずに逝つてしまつた。毒氣のない可愛いゝ事を云ふ奴であり、稚氣滿々たる所も多分にあつた人間だつた。

校內夏季實習は唯工場の中で唄を歌つて暮らしてしまつた。最後の製絲實習の時に飯田の好きな女工さんの受持の所に私が座つたと云つてカン〳〵に怒つて來たが俺は「天國に結ぶ戀」の流行歌を敎へる事に依つて煙に卷いてやつた。

飯田は音痴？だつたかどうも歌は下手だつた。俺がその頃から下手な尺八を始めたら何時でも味噌が腐る〳〵と云つてはからかつたが、此の間會つた時には「俺も尺八を始めた。今千鳥の曲をやつてゐる」つてあの細い眼を益々細くして笑つた。俺はなんとも云はず、さうかと返事をした丈だつた。

俺は歸りの汽車の中から千曲川原の月見草を眺め乍ら何にか知らん胸にこみ上げて來るのをどうする事も出來なかつた。虛無的な微笑か？空虛な勝利か？今も何處からか「今千鳥の曲を始めてゐる」と手紙が來さうな氣がしてならない。

併し死は嚴然としてゐる冷たい惡魔だ。飯田のニックネームは「坊主」「チカチャン」だ。坊主と云ふのは學校の運動會に坊主に變裝したのがとても似合つたからだ。

「チカちやん」は知る人ぞ知る。眞に意味深きものではある。この名を一番よく云つたのが中野だつた。南海の端で之を見たら馬鹿を云ふなと云ふかも知れぬ。

一年生の野外演習は長野方面だつたが、飯田はもう坂城邊りで豆を作つて、到頭戸倉で落伍だつた。俺達が長野からヘトヘトになつて歸つて來た時、奴の云ふ事には「俺は先見の明あり」と。開いた口がふさがらなかつた。何處まで負け惜し

みの强い奴かと……。

試驗は誰も苦手だつた。飯田も俺も嘗息吐息の勉强さ。併しその結果は俺は二科目飯田は一科目の缺點さ。

信濃路にも春が來て乳色の雲が浮いてゐた。霜柱がとけて路はぬかつて來た。氷がとけて小川の水がうすく濁つて來た。兩手を上げて呼び戀けたいやうな「衝動」に驅られる春だ。それだのに亦試驗を受けなほし、あゝ苦しかつたな――。

二年になつてから飯田も俺も修巳寮を出た。一緒に自炊をするやうに話をしてあつたが都合で出來ず飯田は河村君と共に紺屋町に、俺は常田に別れてしまつた。あの當時河村は紺屋町の人氣男だつた事を附記しておく。

學年始めは試驗はないし長い冬からの解放のため至極伸びりしたものだつた。自分の好きな事が出來るのもこの時期だ。

飯田の好きなものは語學だつた。よく二人で今は海野町に移つて來たが元本局の邊にあつた古本屋に通つたものだ欲しい〳〵と思つてゐたギッシングの夏秋冬の三册を武圓で買つた事がある。その時飯田はアラビヤンナイトを買つたと思ふ。併し飯田も俺も何にもまとまつた物を讀むでなく唯漫然と亂讀に過ぎなかつた事は返す〳〵も殘念な氣がする。

飯田は藤村詩集が好きだつた。特にあの「小諸なる古城のほとり」が好きだつた。この十月頃だつたと思ふ。二人で小諸迄歩き通した。染屋台の所で車引きと一寸した事で口喧嘩をし始めた。つまらぬ事は止めろと引張るやうにして行つたが後の御機嫌の惡かつた事。

併し岩門邊りからは大部機嫌も直つた。二人で林檎を喰ひながら北大の寮歌を歌つた。丘を越えても歌つた。空は眞青に晴れてゐた。櫻が眞赤に紅葉してゐた。稻が眞黄に色づいてゐた。

大屋から中仙道に出た。話は到頭お國自慢になつてしまつた。飯田の信州の秋に對して俺は三河の海の白濱を以て對した道の兩側の柳が風にゆれて下の小川が秋を謳つてゐた。

こゝら邊りに矢島兄の家があると云ふので兩側の家を見て歩いてゐる中ヒョッコリ氏が出て來た。「ヤア」「ヤア」と云ふやうな譯で氏の宅で畫御飯を御馳走になつた。

腹が充分になつたら急に眠むくなつて來た。驚いて布引觀音に向つた。千曲川の水が秋の陽に輝いてゐた。堤の柿が眞赤に色づいてゐた。布引觀音の巖に腰掛けながら俺は生嘴りの西行論を一くさりしたものだ。「自己を生かすために自然に入つて行つた事はよい事とは思ふが併し現代では到底それは不可能な事だ。自己を生かすためには自己を强く主張せねばならぬ。自己を强くせねばならぬ。例へば惡魔のやうに」と飯田は云つたやうに憶へてゐる。岩の蔦がハラ〳〵と風にゆれてゐた。

懷古園に着いた時はもうそろ〳〵暗くなつた。藤村碑の前に二人は何時迄も〳〵うづくまつてゐた。若い日のセンチな涙を流しながら。

俺は學科の事については云ふ術を持たぬクラスのラストは何時も俺だつたから。特に苦手はS教授の組織色染だつだ。

飯田も餘り得意ではなかつたらしいが併し俺見たやうに解らないと云つて全然捨てはしなかつた。コツ〳〵と勉强して居た。材强學のやうなものもコツ〳〵と西寮の暗い二階で勉强してゐた。アルプスの麓で生れた完全なる信州人の特質を備へて居り又現はしてもゐた。

飯田は學科は飛び拔けて良いものも無いと思はれたが又飛びぬけて惡いものも無かつたらしい。皆平均して居て生徒らしい生徒だつたと思ふ。

運動は野球部だつたが下手だつた。アルバムに出て居る姿だと凄い本壘打王に見えるが實際は下手だつた。松高と市營グランドで試合をした時敵の放てるフライを取るため前へ出すぎて球を後に落してしまつたやうな事もあつたから。

飯田の人間味のある男だつた。强情の一面案ずれば一面白い男だつた。交際すれば一面白い男だつた。

外に涙もろく却々親切味があつた。

Oと云ふ男の爲めには可なり盡したやうだが到頭Oはその甲斐もなく今は台灣に居る。飯田の死を知つたらさぞかし在りし日を偲んで感慨無量であらう。

百瀨と飯田と三人で黄金澤に行つた事がある。百瀨の下宿で日の丸辨當を五つ戴いた。五月の風が吹いて麥の香りがプンと鼻をついてゐた。躑躅が眞赤に燃え山吹が眞黄に咲いてゐた。若い日の感激が渦を卷いてゐた。壺時に岩に腰かけて一つづゝ日の丸を喰へた。殘りの二つを籤にしたら俺が外れてしまつた。飯田は喰べる權利ありとばかりに喰べてしまつたが百瀨は俺に半分割つて呉れた。百瀨も飯田も愛すべき好漢だ。

歸りに山口から修巳寮のポプラが好く見えた。葉がキラ〳〵と陽に映つて美しかつた。「美しいなー」とさも感じたやうな聲をした「ポプラの葉ずれに神の聲を聞くなんて飯田のやうな詩人でなくては出來ない事だ」と皮肉つたら「馬鹿野郎」と大きな聲を張り上げた。百瀨は邊でカラ〳〵と笑つてゐた。噫今も何處からか「馬鹿野郎」と怒鳴る聲がするやうな氣がする。怒鳴つて呉れたらな百瀨も北支の空でカラ〳〵と笑つてゐる事だらう。

あゝ人間の運命ほど測り知れぬ物はない運命に對しては人間の力なんて眞に弱い小さなものだ。あの時誰がこんな事を書かうと思つた事か。誰がこんな風になると豫測出來たか。一人は國を離れ今一人は永遠の旅路を辿つてしまつた。

人の世の儚なさに西行は世を捨てた。芭蕉は寂寞の世界に身を投げ入れた。學科の點數の一點二點を競ふ人は偉い。競はぬ人も亦偉いと思ふ。風吹く儘に木の葉が散る。時が流れる儘にあゝ人は逝く。

飯田は盃を取つてはクラスでも五本の指折りの中だつた。戸倉で呑んだ時も別所で驚いだ時も目を見張る位だつた。濃い胸毛を出して「淺間湯の町ヨイショ〳〵な」と歌ふ姿が目に見えるやうだ。

併し飯田の本當の姿はそう云ふ中では見出されないやうに思はれた。どちらかと云ふと淋しい心の持主だつた。何故か遠い所をジット凝視して歩いてゐる人間だつたやうに思はれた。

千曲河原に月見草が咲いて白い蛾が遠く母の腕を思はせるやうに舞つてゐる晩等だまつて何處迄も〳〵も二人で歩いたものだつた。人生と云ふ大きな問題ではなく唯毎日々々の生命について――人間と云ふ者がどんなに儚ないものか――要するに若い者の惱みなどについて、色々と語り合つたものだつた。

俺は西行の樣に自然の中に入つて見たいものだと云つたら、そんなセンチを捨てろそして重役になる氣持になれと云つたが併し飯田自身も人生に對して大きな希望は抱いては居らなかつた。抱いても出來ぬ事を承知して居た。凡ゆる青年のやうに矢張り「セッナ」主義だつたと思はれる。

卒業後飯田は桐生の兩毛に勤務したが中途で病氣のため歸國してしまつた。それが人生を了へる第一歩だつた。

その後徐々に回復して今年の四月頃から人絹工場に勤めてゐる等手紙を呉れた。この六月末俺は一寸用事があつて上田に來た時には大分元氣な顏をしてゐた。

岡先生から飯田が高橋さんの所に下宿してゐると承り早速訪ねて行つたら丁度夕食をしてゐた。夕食後訪ねて來ると約束して俺は兄の家に歸つた。兄と星野君と三人で飲んでゐる所へ訪ねて來て呉れた。そこ〳〵に二人で千曲川に遊んだ。

馬場町は夜店で賑ぎやかだつた。月見草には未だ早かつた。上田橋から稻荷さんの所まで語りながら歩いた。身體が徐々に回復して來て嬉しい事や俺の勤務先の狀態など――。

體が眞に回復したら俺の方に來て見ないかと云つたら考へて見ると答へたがあゝ何時の日にか來る事か。

待つ友は來らず。思ふ友は來たらず。あゝ卒業後久し振りに友愛を溫めたが思へばあれが最後の名殘りだつたかな。

あの時今何にか讀んでゐるかと云つたのでアンナカレニナの一部の方を讀み戀けてゐるがと答へた。讀み終へたら俺にも一寸見せろと云つた。あゝ貸すよと返事をして置いたが何時の日にか貸さん。

あゝ千曲の水はあの時も綺麗な色をして流れてゐた。今も流れてゐる。

併しあゝその堤に立つて語つた人よ。思出は新しいが現實の冷さに泣くは誰か。たましいか。將た風か。

男の譽れ召集された、即日歸國で殘念だ、體を丈夫にして今一度立ち上る積りだ、白骨溫泉に行つて來る、と云ふやうな便りを受けてから間もなく體を亦惡くして今家に居ると云つて來た。

左程とは思はなかつたので通り一遍の見舞狀を出して置いた。暫くしてからトンビ地とオーバー地を買つて呉れと云つて來たが却々送らなかつた。漸く送つたのが十一月の始め頃だつた。そしたらとても寒んだ返事を呉れたが、あゝそれも唯枕元に置いて眺めた丈であつたらうに。

あゝ、飯田の死出の旅衣を買つてやつたやうなものだつた。

人の世にまつわる運命の絲の不思議さに今更のように驚くのみだ。躓けばとて嘆けばとて逃れ得ぬものが運命だと思ふ。

人間は何んの爲めに生れ何んの爲めに生きて行くか知らず。唯人の世の儚さと運命の不可思議さに驚き慄くのみだ。

逝く年の嘆きを負ひて獨り旅
來らむ春の花にそむきて

多端なりし十二の年も逝く。友一人失ひて一しほ淋しさと寒さが身に泌みるやうだ。伊吹の山も眞白だ。あゝ又みぞれが降つて來た。信濃路は雪だらう。友の眠れる墓もすつかり雪に被はれてしまつてゐる事か。十三の年は來るも逝きし友は來らず。あゝ、細井の奴又くだらぬセンチなものをぬたくつてゐる馬鹿野郎だなと何處かで飯田が笑つて居る事だらう。

もう一度その聲を聞きたいものだ。

二十一日に氏の御尊父樣より氏の死去を承り呆然としてしまつた。すぐに級友一同に通知し心ばかりの香覓を送る事にした。

河村信夫、小澤利雄、北野三郎、柴田久村橋洪、中野哲秀（六朗）、木山新一の諸兄も心から悼まれ、早速香覓を送り下されその厚き友情をお知らせするのを喜しく思ひます。

最後に氏の御家族樣より臨終の有樣を書き送られしを一部分書かして戴きこのくだらぬ筆をおきます。

十一月頃は大變快方に向ひ非常に喜んで、それは小供のやうでした。師走に入つてから日毎に弱り九日から寢つくやうになつて了ひました。三日ばかり前もう助らない、俺も二十日までの命だと云ひ十八日は今夜かぎりだと申して母や皆を泣かせました。氣は最後まで確かで痩せ衰へてゆくのがどんなに悲しかつたか。一週間ばかりは注射で生き延びて參りましたやうなものでした。十九日のその朝は珍らしく林檎や蜜柑を食べたいと申し、少ししてから靜かに寢みました樣でした。暫くしてから見ますと先程迄して居つた安らかな寢息が感じませんので呼んでみましたが最早冷めたくなつて居りました。

その時の驚き悲しみは何卒お察し下さいませ。安らかに眠る樣に逝きました枕邊に寄れば今にも動くやうに思はれてなりませんでした。氣短で我儘者でしたが非常によい兄でした。もう一言聲を聞きたうございます。あんなによい兄、世の中に二つとない何物にも代へがたい兄でした。わけて今しみ〴〵と感じます。

飯田喜雄君を憶ふ

野口新太郎

去年の十二月『其の後飯田君から一向便りがないが悪いんじゃないか』なんて噂してゐた頃、二十日の朝だつたか突然飯田君の厳父から君の死を傳へて來た。悪いんじゃないかとは思はぬでもなかつたが餘りにも意外であつた。夏休みに歸る時『此の頃どうもまた快くないから暫らくうちで靜養して來る』とて歸つたが、其の後間もなく今度の事變に召集されたが病氣の故即日歸郷になつた、と云ふ事はきいてゐた。然し死ぬ程悪いとは終ひ思はなかつた。そう云へば歸る時分には何となし淋し氣で元氣がなかつた。無理してゐたのだな、等々あれこれ憶ひ起されて今更愁腸の念に堪へぬのである。

○

飯田君はもと〳〵決して弱い体質の人ではなかつた。小柄ではあつたが幅廣いがつちりした體格でなか〳〵丈夫だつた。輜重特務兵として兵隊にも行つて來た體である。それが學校を卒業して桐生の紡績工場へ就職して僅かの間に何時か健康を害し、暫らく療養に努めたがどうもはか〳〵行かなかつたので遂ひ會社を辭めるに至つたのださうだ。

何でも夏の暑い最中腹を害して長く下痢してゐる裡に腹膜になつてそれから當座三ヶ月程は全く寢たきりだつたさうである。

學生生活から工場と急に生活が變るのがいけなかつたのか、あんな丈夫さうな人に思ひ掛けない事であつた。

○

其の後飯田君が學校へ勧める事になつたのは一昨年の秋だつたと思ふ。もう病氣の方はすつかり治つたと云ふて來た。然し當時の君は長い病苦のためか何處か弱々しけで何だか急に齢も寄つた樣な感がするのであつた。頭などもかなり薄く禿げてゐた。けれどもそれから學校の潑剌とした空氣に浸つて君の涸れた心身は次第に生氣を帶びて昨年の春などもう別人の樣に元氣が出て來たのであつた。テニスもやる樣になつた。尺八も習ひ初めた。『飯田君も來た當座はまるでもやしの樣な體だつたが此の頃はすつかり達者になつたな』とは君の元氣な姿をみてよく周圍の人達の語り合ふ言葉であつた。

それがどうした事かその夏に入る頃から兎角元氣勝れず時折又下痢したとかよく意儀さうな顔を見受けるのであつた。それから間もなく夏休みに入る時『暫らく郷里で靜養して來る』とて歸つたのが遂ひ最後になつて了つたのである。

○

飯田君と僕とは同郷である。中學も同じだ。そんな事から比較的交際もあつた方だつた。よく僕の下宿にも遊びに來て呉れた。話は多く郷里の事に及び靜かな口調でゆつくりと話しては歸つたものだつた。その話し振りや物腰がとても學校を出て間のない青年とは思はれぬ大人びた感じであつた。決して悪い感じではない。まあ謙德圓滿な好々爺といふ感じである。そう云へばたしか君はクラス仲間からも親爺とか隱居とか云ふ尊稱を貰つてゐたと記憶する。全く君には何處かそうした風格が感ぜられて親しみ易い又人懷い氣がしてならなかつたのである。矢張り薄命の人、早く世を去る人だつたからだかも知れない。

○

僕が君に就ての思出は特に野球部に關して深い。どの部でも同じだがマネーヂャーの任務はなか〳〵大抵ではない。大きくは部の統括から細かくはその小使仕事までそれは全く一通りの事ではないのである。我が飯田君は之を實に獻身的にやつて呉れた。野球部では毎年夏休みに家を借りて合宿するのであつてその間炊事掃除一切をやるに婆さんを雇ふのである。處が飯田マネーヂャーは之を進んで引受けて實によくやつて呉れた。僕が部長の役目柄時折合宿を訪れる時、選手達が食事を終へて練習に出掛けた後に君一人或は大バケツ片手に皆の食荒した食事の後始末してゐたり、或ば家の雜巾掃除或は裏の井戸端に米洗ひ等に、いつも僕は此の光景を見て氣の毒やら有難さやらで目頭があつくなるのであつた。若い時にはこんな雜事は特に馬鹿臭いものだのに。

○

飯田君はどこまでも地道な人だつた。謙德の人だつた。斯く思へば君の思出は果てない。惜しい人であつた。嗚呼今更追想の哀に堪へない。

（一三、二、一二）

榊原敏男君を偲ふ

在京城　N生

『バラ公も弱くなりました。御笑ひ下さい』と云ふ便り（十二月六日附消印）を君から貰つて一ヶ月そこ〳〵ではかなくも君は逝つた。恐らくあの便りは死と云ふものが直ぐ目の前に歩みよりつゝあり事を豫知せずに書かれた言葉だつたろうと想像される。獨り淋しく故郷で親身の方々に見護られつゝ瞑目した臨終の模樣をあれこれと想像し短かゝりし在鮮五ヶ年間の事共の一端を顧み君を偲ふ二三の事を追憶してみる。

御居蘇氣分の拔けぬ正月三日大虎になり歸宅した夜君の訃報に接した。全く意外だつた。

ほんとうとはどうしても信んぜられない。此れが結局世の常なんだなんてそんな簡單な氣休めの言葉ではどうしても片付けられない。

あゝ幽明境を異にし既に君は此の世の人ではないか。バラ公よ。

京城は今永い沈默のベールを一枚〳〵とぬぎ捨て新しき春への歩みを默々として續けてゐる。

間もなく春だ。

○

『在鮮五ヶ年、何んの爲めの渡鮮でありそして何物を得たでせう』との便りであつた。（十二月二十五日附消印）

はる〴〵上田から大きな希望と抱負を抱き黑潮おどる玄海の荒波を横ぎり大陸に第一歩を踏みこんでから五ヶ年間半だ。今にして考へれば幾多の試練に見事堪へいざこれからと云ふ時不幸病魔におかされ來るべき春を待たずして突然散つた。定めし殘念だつたろう。運命の神は餘りにも皮肉だ。

然し君としては此の五ヶ年間に公私ともに周圍の人々に與へた無形の好感はどんなに大きい事だつたろうか。これも皆君の圓滿な人格の然らしめた處と信じて疑はない。それだけ君は或る意味に於て大きな存在だつた。

油蟬のなきそうな蒸し暑い夏のあの日京城驛で最後の見送りをした時誰れが此れが永別であり歸らぬ友であるとして君を見送つたろう。君をして云はしむれば思ひ半にして病める身を鄕里に靜養せねばならなかつた事は如何にも殘念だつろう。あの便りは君からの最後の音信だつた。最早二度と君の便りを手にすることが出來ない。

『うすぼんやりとした過去の生活…』と云ふ便り（十二月六日附消印）に就ては學生時代の君は全然知らないが渡鮮後の君は一番俺がよく知つてゐる筈だ。何時の便りにも『書きたい事があるが書く氣にならない』と云つてゐた。其の書き度い事聞いてもらいたい事を誰れにも話さずいや書く機會話す機會もなく靜かにねむつたろう君の心情は恐ら〳〵誰れよりも俺が一番よく知つてゐる樣な氣がする。何時の便りだつたか病院から出て來て此の便りを書いたと云つてゐたが、其の後は丈夫で熱も出ないが肉が付かないので氣がいら〳〵する。十二月には再び御目にかゝれると十二月の歸城をどんなに君自身心待ちこがれた事だつたろう。

然し神は齡を君に與へなかつた。再び懷しい朝鮮の土を踏み得ずして君は不歸の客となつた。

○

『非常時の鳳はこんな田舍をも吹きまくり昨日今日と此の村からも征途にのぼるものが澤山あります。それなのに軍籍にある自分は（特務補充兵）御奉公も出來ず白いベットの上で自分のかすかに動く心臟の鼓動をじつとして聞かねばなりません。此の度は殘念でたまらないがいかにもがいても御奉公は出來ません。また日に必ず二度の御勸めを果さしてもらいます』との便り（十一月十五日附消印）は君が歸郷後海濱病院で最初に俺に呉れた便りだつた。渡鮮後五年振りで郷土をふみ久し振りで親身の方々にまみえたのが病めるあの身だ。君としては斷腸の思ひだつたろうと思はれる。然し何時の便りにも必ず再起すると云ふことであつたので其の瞬間も敢て再起と云ふ苦しい文字でいためる自分の心のせめてもの慰めとしたゞろうことを想像し一入憐憫の情切々たるものがある。

○

暮れて一昨年の冬だ。まだ君が頑健でそれこそ若鮎の樣にぴん〳〵してゐた一月の或る土曜日の午後だつた。

君と俺と伊藤君、桐山君とチョンガー四人で粉雪のチラ〳〵降る中をリツクサツクを脊負ひスキーを持ちガンヂキを付け京城から三里餘の北漢山に登つたことがあつた。中腹の寺に一泊し朝までねむれないで終夜語り明したことがあつた。

君の記憶にもあることだろう。

眞夜中靜寂そのものゝ樣な深い山で將に西の端に落ち樣とする寒日を樹氷の間から心ゆくまで眺めた時神秘的な山の靈がひし〳〵と身に迫る樣に感ぜられたあの夜の四人の語らひは今でもはつきり思ひ出される。初めて冬の登山をした俺は翌日途中で落伍し君等三人に手をひかれて下山して笑はれたのも今では君が在世中を偲ふ語り草の一つとして忘れ得られないものゝ一つだ。

山を好きだつた君ともう山にも行けなくなつた。

○

君はラグビーが好きだつた。

野球は何時の試合にも君が捕手で俺が投手。此のバッテリーで京城の大會にも何時でも出る心臟の强さだつた。迷コンビとして何時でも卒先して走り廻つたものだ。

無口なバラ公は何時でも飲めば『ハアー、ハアー』とあの奇聲をあげ默々としてゐたのに。明治町の君の一番好きだつた伯母さんも君は必ず全快して歸られると信じてゐたらしい。訃報をきかした時心もちがつかりしてゐた。獨り伯母さんばかりではない。人に好かれる君の死を聞いた誰れでもが意外だつたらしい。かく惜しまれるのも皆君の德の然らしむる處だ。

バラ公よ！心安らかに眠つてほしい。

千曲會支部設立の時もなにかと心配されたものだ。

在城同窓生で惜しい人に逝かれた。

○

あれこれととりとめもなく考へると書かねばならぬことが澤山ある。然し今は總て空しく戰捷の喜びのかげに君のみは獨り淋しく散つた。君の過去五年間の在鮮生活は君の云ふ樣に決してボヤけた生活ではなかつた。總ては大なり小なり、『人間バラ公』の全貌を覗ふに足るものゝみだ。

バラ公よ。

原蠶も桑砂に立派に建つた。恐らく全鮮一だろう。檢定所も取締所の横に出來た。これで本道の蠶業陣容もひと揃ひし四月からみんな足なみ揃ひて進軍する。唯君一人の缺けた事はこの上ない淋しさだ。君としても思出多い宜化堂で仕事の暇を見てこの拙文をものしてみた。

バラ公よ！心安らかにねむつて呉れ。淋しかろうが。

（一、二〇、於宜化堂）

原公を見舞ふ

枇杷木瀧雄

十一月十二日茅野君より原公病氣にて歸省、靜養中の由、詳細不明なるも大した事もないらしいとの便りを受取つた。近ければ直ぐ見舞に行く處だが當時は仕事も多忙だつたし、暮には歸省すると云ふ氣持も平傳つて心配しながらも二十四日迄延ばして訪ねた。それ迄二度手紙を出して一度返信あり、肺結核にて退職し只今不眠症神經衰弱氣味で困つてゐる、歸省の際は是非寄つてくれとの事だつたので豫定の二十四日を一日原公の處で過す積りにし、午前十一時岡崎驛着を報じて置いて、午前七時に着いた。生憎兩の降る寒い日で待合室の小さなストーブで暖を取りながら、卒業以來始めて會ふ原公の顏を想像しながら長い間を待つた。

然し時間は來ても影も形も見えない。愈々心配は增し、教へられる電車にて一里、原公の常に自慢たりし家康生る康生町に、番地が分り難く、町の世話人に聞きやつと實家に着く。御義姉樣に御會ひし今田舍で御母堂が一緒で靜養中の由のみなり。病狀に就てあまり多く語られないので益々心配になり、折角此處迄來て會はずに歸へるも殘念に思つたので何んとか方法がないものかと考へてゐたら、幸ひ醫者を運んで道を知つてゐる人力車を頼んで載いて一家の農家に着いた。嬉しさの餘り元氣良く『今日は！』と入つたが以外の樣子に驚いた。寢てゐて起き上る事出來ず顏は青く、非常に痞せて衰弱してゐた。これで平常はあれ程手紙を書いた原公から返信のなかつた理由が譯つた。其の點皆樣に於かれても赦してやつて戴き度い。御母堂にはそこ〳〵の挨拶にて驅上り

『オイどうした』

『オ、來てくれたか。不便な處をすまんナー』

調子は昔と變らないが、弱い聲が物足りなかつた。

久しぶりの對面であり、樣子を見て一時に胸が硬直した。

『懷かしいノー』

『會ひたかつたぞ。最近胃を壞はして痞せた。耳が遠くなつてゐるから少し大きな聲をしてくれよ』

耳が遠く一方は殆んど聞えぬらしい樣で話してゐても變な處で笑つたりする處は誤聞してゐるらしかつた。

『今は寒いから體を大切にして、春になれば氣候も良くなり從つて體も良くなるから退職の事など心配せずに呑氣に靜養したがいゝね』

『今では何んとも思つてゐないが職を失つた當時は實に淋しかつた』

語つてゐる間にも仕事に如何に眞劍であるかゞ伺へる。

『胃が良くなれば直ぐ全快すると思ふからそしたら信州を廻つて又朝鮮に行きたいと思つとる』

『先づ東京を訪ねる事を忘れるなよ。それから信州朝鮮滿洲と行けよ』

『ウン東京を案內せいよ』

彼の朝鮮での六ケ年、私の上田の四ケ年、東京の二ケ年をボツリ〳〵語り合つたが、咳、痰が多くなるので話を打切つた。尙ほ腹中全部を話し得なかつたのを齒痒くも殘念に思つた。

『會つてゐると割合に話す事もないもんだの！。今夜はゆつくり泊つて行けよ』

『ウン何れ又上京の時都合付けて寄る事にする』

あまり淋しい樣子なので汽車の時間を見る氣にもなれず、御母堂とも話したりしてゐたが冬の日は短く、雨の降つたせいもあつて四時には暗くなつた。勸められる儘に食事を御馳走になり、六時岡崎發下關行に乘るべく盡きない名殘りを打切つて

『ぢや春には出て來いよ』

『おゝ行く。わざ〳〵すまんの。省にもよろしく云つてくれ』

と原公の家を辭した。バス道迄御母堂に送つて戴いた。道中

『もう駄目とは諦めて居りますが、それでも親心で何んとか全快する法はないかと心配して居ります。六十四になりましたが、あれが病氣してからはすつかり年寄つてしまひました』

と申されたが、看護が實に行屆いてゐて、母のない私は痛切に情の深いに感心した。原公の全快を祈りながら夜行に乘り込んだ。（廿四日午後六時）

一月八日歸京して沓掛君より原公の死を知つた時は暫し口が利けなかつた。二週間前に會つた原公が、目で見た原公が話をした原公が、あれだけ約束して置きながら何故死んだのだろう。運命の惡戲は大きい。思出はあまりに新らしくてペンも進まぬ。入學して寮の同室に起居し最後に會つた緣は淺からざるものがあつた。

然し今は其の緣も斷れてしまつて回想は一入物淋しい。

原公の歌ひし、岡崎小唄『五万石でも岡崎樣はヨイトサーサ　お城下まで、お城下まで舟がつくヨイトサーサ』

五万石の城下岡崎は原公の永久に眠るには最もふさわしい靜かな處である。原公よ安らかに眠れ。

（二月一日）

滿支產業講演會

本會の事業として滿支產業講演會（第一回）を左記により開催致します。多數御出席を願ひます。

記

日時　二月二十八日（月）午後一時より三時頃迄講演
　　續いて之に關する座談會を開催す

會場　講演・母校講堂　座談會・千曲會館

演題　滿支蠶絲業に就て

講師　農林技師　田口敏夫氏

昭和十三年二月

千曲會內　滿支產業調査會

會員動靜（二月五日現在）

移動ノ部

朝比奈晃十（舊職）（勤）從前通リ（住）名古屋市千種區大久手町三ノ五
清水寬孝（舊職）（勤）名古屋市港區熱田新田六七ノ側、名古屋市工業指導所（住）岐阜縣不破郡宮代村
白倉一男（現職）（勤）本校養蠶科（住）上田市踏入
清水達太郎（蠶一）（勤）ナシ（住）東京市板橋區石神井關町一ノ一二七
篠原善次（蠶一）（勤）從前通リ（住）厩本市富士見町一一七一
小林啓介（蠶四）（勤）從前通リ（住）東京市豊島區西巢鴨町二ノ二六六八
秋山愛次郎（蠶五）（勤）從前通リ（勤）八王子市外小宮町西中野三五九三
久保田昌人（蠶七）（勤）諏訪郡川岸村、片倉川岸製絲所（住）川岸村一九六〇
坂田正賛（蠶八）（勤）奉天省立海城國民高等學校（住）奉天省海城街一九ノ二
安中勳（蠶九）（勤）福岡縣築上郡八屋町、築土郡築蠶業組合（住）築上郡黑土村大字久路上七一七
矢野昌雄（蠶一三）（應召）
武本本治（蠶一三）（勤）從前通リ（住）東京市目黑區原町一三四一
竹內孝三（蠶一四）（勤）東京市杉並區高圓寺、農林省蠶絲試驗場（住）杉並區神明町六〇
細川俊雄（蠶一八）（勤）從前通リ（住）甲府市橋町一四
白川孝昌（蠶一九）（應召）
若林榮（蠶一九）（勤）宮城縣柴田郡村田町、宮城縣是共榮蠶絲株式會社枯田出張所（住）村田町本町
岡本正男（蠶一九）（勤）從前通リ（住）水戶市西原町三二二六
榊原敏男（蠶一九）昭和十三年一月四日死去
小野寺克治（蠶一九）（改姓）佐藤ト改ム（勤）從前通リ（住）酒田市北千日堂前大道深三ノ七
頼富正廣（蠶二〇）（應召）
宮川千三郎（蠶二〇）（勤）東京府南多摩郡日野村、農林省蠶絲局蠶業課
倉元隆太（蠶二〇）（應召）
入佐一郎（蠶二一）（勤）東京市麴町區大手町、農林省蠶絲局蠶業課
前島正直（蠶二二）（勤）小縣郡鹽田村、鹽田公民學校
藤田四郎（蠶二二）（勤）從前通リ（住）前橋市國領町三二九中野方
伊藤幸男（蠶二二）（勤）大分市大道町、片倉大分製絲所
出野正雄（蠶二二）（勤）滿洲國新京至聖大路、國務院產業部農務司、電話（2）九二三ノ二七六（住）新京永昌胡同、香闌莊、電話（2）五一八三
西澤政人（蠶二三）（勤）諏訪郡下諏訪町、昭榮製絲下諏訪工場
竹內好武（蠶二三）（應召）
星野莊次（蠶二四）（兵役）朝鮮會寧、步兵七五聯隊第六中隊
原田正次（蠶二四）（勤）岐阜縣加茂郡太田町、岐阜縣蠶業取締所御嵩支所太田出張所（住）太田町、大矢泰市方（應召）
二木三雄（蠶二四）（應召）
杉野壽一（蠶三）（勤）從前通リ（住）長野市北石堂町一〇一四
鈴木孫一（蠶四）（勤）諏訪郡永明村、諏訪生絲販賣購買組合聯合會龍上社
久保田一德（蠶四）（勤）大阪市外守口町、東洋紡績科學研究所、電話堀川四七〇三（住）大阪市旭區新森小路町北二ノ七〇
菅井辰三郎（絲四）（勤）東京市滯田區仲六鄕一ノ四
三浦重雄（絲七）（勤）埼玉縣兒玉郡本庄町、富士瓦斯紡績本庄工場
楠田元之助（絲七）（勤）高知市北本町、郡是高知乾繭場（住）高知市北本町
佐藤與四次（絲八）（勤）從前通リ（住）群馬縣碓氷郡安中町二九七六
石濱正巳（絲一〇）（勤）從前通リ（住）前橋市岩神町二三六
滯生勇一（絲一〇）（勤）島根縣鹿足郡日原村、組合製絲石西社
蛭田修三（絲一二）（勤）橫濱市、神榮生絲橫濱支店輸出部（住）橫濱市中區西戶部二ノ二三八
武藤寬一（絲一五）（勤）從前通リ（住）橫濱市神奈川區大口通一三六
星野豊（絲一六）（改名）柏弘ト改ム（クラヒロ）
山崎通雄（絲一七）（勤）鹿兒島市山下町、鹿兒島縣經濟部蠶絲課（住）鹿兒島市山下町八四
小池貞章（絲一七）（住）小縣郡縣村田中
秋山武一郎（絲一九）（勤）朝鮮忠淸南道太田部本町三丁目、郡是製絲太田工場

望月　弘（絲一九）
大石　唯男（絲一九）
小澤　正一（絲一九）
山崎　甞錄（絲一九）
藤森　明美（絲二〇）
石井　清六（絲二〇）
益淵　誠正（絲二一）
永田　俊三（絲二一）
猪原　良芳（絲二二）
秋山　實（絲二三）
岩田久太夫（絲二三）
青木　善次（絲二三）
山口　直吉（絲二四）
東島藤次郎（絲二四）
三澤　讓（絲二四）
森　福一郎（絲二四）
本庄　昇（絲二四）
川村　千尋（絲二四）
石松　博（絲二四）
川船　卓爾（絲一〇）
安本武一郎（絲一六）
碓氷　茂（絲三）
西村　武男（絲四）
阿久澤孝典（絲四）
櫻井　隆夫（絲四）
垣内　源一（絲五）
今村與四郎（絲五）
橋本和夫（絲六）
大谷隼人（絲七）
橋本辰次郎（絲七）
山下　昇（絲八）
藤井富美男（絲八）
三浦長平（絲九）
和田貞政（絲一〇）
花房清一（絲一一）
北澤琢郎（絲一二）
山田隼男（絲一三）
山本七郎（絲一四）
沓掛祥平（絲一五）
平野庄一（絲一六）
小林典夫（絲一六）
矢崎　勝（絲一六）
尾和博行（絲一六）
諸岡一郎（絲一六）
北澤茂樹（絲一六）
村橋　增雄（絲一六）
瀧澤　通（絲一六）

（勤）神戸市、農林省神戸生絲檢査所
（勤）朝鮮江原道春川、江原道蠶業取締所（住）江原道春川郡春川邑昭陽通四丁目
（勤）上伊那郡伊那富村大字宮木、伊北農商學校（住）上伊那郡辰野
（勤）本校圖書課（住）從前通リ
（勤）鳥取市、鳥取縣經濟部農產課（住）鳥取市東町八二ノ四
（勤）朝鮮全羅南道光州府鶴岡町、鐘紡光州工場（住）同上社宅
（勤）奉天省海城縣公署行政科
（勤）從前通リ（住）松本市城山七三〇
（勤）倉敷市外酒津　倉敷絹織株式會社研究所
（兵役）宇都宮輜重兵一四聯隊第二中隊第二班
（勤）從前通リ（住）東京市澁谷區下通五ノ一〇
（應召）
（勤）横須賀市、海軍航空廠兵器部火工課（住）横須賀市浦郷三〇五五蒲谷半五郎方
（勤）盛岡市仙北町、岩手縣是聯合會
（應召）
（勤）從前通リ（住）東京市世田ケ谷區北澤一ノ一一八九佐山方（應召）
（勤）從前通リ（住）東京市世田ケ谷區北澤一ノ一一三六北澤會館
（勤）從前通リ（住）東京市世田ケ谷區北澤四ノ五六一小川方
（勤）從前通リ（住）名古屋市千種區春岡通一ノ二
（勤）從前通リ（住）米子市立町四丁目
（改姓）原ト改ム、（住）東京市豐島區雜司ケ谷二ノ四五四
（勤）從前通リ（住）東京市杉並區荻窪一ノ六四
（勤）愛媛縣伊豫郡松前町、東洋絹織株式會社（住）松山市御室三二番地ノ二四番戸
（勤）本校蠶絲化學教室（住）上田市膳匠町原春太郎方
（勤）横濱市中區北仲通五丁目帝蠶ビル、大日本生絲販賣組合聯合會
（勤）滿洲國奉天市大廣場三井ビル、滿洲國綿業聯合會（住）奉天市彌生町四四ノ五
（勤）從前通リ（住）神戸市灘區上野通リ五ノ一五六
（勤）從前通リ（住）三重縣龜山町驛前東通リ
（勤）從前通リ（住）名古屋市千種區田代町堀割一〇九
（勤）大連市日吉町一番地、滿洲製麻株式會社（住）勤務先社宅
（勤）從前通リ（住）臺南市三分子一五八
（勤）福島市外杉妻村、日東紡績福島工場
（勤）大阪府泉北郡大津町下條、協和紡績株式會社（住）大津町下條松ノ濱七六二ノ三
（勤）神戸市林田區一番町四丁目、商工省神戸輸出絹織物檢査所（住）勤務先＝同ジ
（勤）從前通リ（住）東京市杉並區和田本町一〇七七
（勤）從前通リ（住）横濱並中區濱松町四七番地殿岡方
（勤）福島縣石城郡錦村　昭和人絹錦工場
（勤）從前通リ（住）靜岡市上沓谷一五
（兵役）豐橋市、豐橋陸軍教導學校歩兵學生隊歩兵砲隊第一區隊
（應召）
（兵役）松本市、松本歩兵第五十聯隊第一中隊第五班
（兵役）鳥取市、鳥取第四十聯隊第一機關銃中隊第六班
（勤）埼玉縣秩父町、秩父稅務署
（兵役）朝鮮咸鏡北道羅南山砲兵二五聯隊一一中隊第一班
（兵役）岐阜歩兵第六八聯隊第七中隊
（勤）岐阜市宇佐海草、日本毛絲紡績第二工場（住）宇佐海草三六六第二工場社宅

訂正

（勤）東京市芝區南佐久間町一ノ一、株式會社八千代電氣商會（住）東京市麹町區九段四丁目一五
（勤）千葉市、千葉縣經濟部蠶絲課（住）千葉市新宿町一ノ二三
（勤）岐阜縣益田郡萩原町、岐阜縣立益田農林學校（住）萩原町萩原一〇六八
（住）鳥取縣岩美郡宇倍野村
（住）千葉縣印幡郡六合村瀬戸二一七三
（勤）茨城縣新治郡眞鍋町大字眞鍋一八〇八、藤本蠶業土浦支店、電話土浦三七九番（住）眞鍋町大字眞鍋一八〇八
（勤）飯田市江戸濱町、聯合會天龍社、電話四三七番（住）從前通リ
（住）神戸市灘區篠原本町四ノ六五三
（勤）秋田市、秋田縣經濟部農務課（住）秋田市十軒町一八
（勤）從前通リ（住）東京市世田ケ谷區松原町四丁目三〇ノ一
（勤）諏訪郡川岸村、片倉川岸製絲所
（勤）山梨縣東八代郡石和町、株式會社鈴木製絲所、電話四五番（住）石和町
（勤）東京府北多摩郡立川町、東京府繭檢定所電話立川四五番
（勤）從前通リ（住）東京市本郷區駒込蓬萊町六、菊地才吉方
（勤）一宮市松降通五ノ二六、片倉愛知製絲所
（勤）諏訪郡川岸村、片倉川岸製絲所
（勤）滿洲國新京特別市、滿洲國產業部鑛工司工業科（住）新京特別市惠民路七〇一政府第一代用官舍二〇號
（勤）富國徵兵保險相互會社地勢監督所（住）從前通リ名簿中應召トアルハ誤リニテ取消
（勤）大阪市北區梅田町二六、發動機製造株式會社ダイハツ砂通リ二ノ三號福島サービス部、電話北（36）一四七一（住）豐中市高
（勤）高岡市上關八八八、日本ヴルツ絹絲高岡工場（住）上ニ同ジ
（勤）從前通リ（住）前橋市岩神町一〇八四
（勤）京都府綾部町、郡是製絲總務課

山崎ゆり（教一）
宮下富子（教五）
飯島　六（教二）
山崎政江（教三）
小宮山順（教三）
小柳しづ（舊教）
中村ふみ（舊教）
森　ふじい（舊教）
吉口春子（舊教）
長谷川美祐喜（舊教）

（勤）ナシ（住）東京市神田區旅籠町一ノ一八、宮下清方
（改姓）吉池ト改ム（住）千葉縣野田町字清水一六三
（勤）愛知縣東春井郡高藏寺（住）勤務先ト同ジ
（勤）ナシ（住）小縣郡神科村大字上田四八六
（勤）ナシ（住）小縣郡鹽尻村上
（勤）ナシ（住）東京市蒲田區矢口町四八六
（勤）三重縣三重郡大矢知村、龜山製絲株式會社五島工場（住）勤務先ト同ジ
（勤）福島縣伊達郡湯野村、片倉伊達工場（住）勤務先ト同ジ
（勤）栃木縣北都賀郡小山町、昭榮製絲小山試驗所
（改姓）杉本ト改ム

新樂顯理（舊職）
高島　秀（蠶二）
鍵谷　傳（蠶七）
前田節男（蠶八）
竹内虎夫（蠶九）
佐藤義助（蠶一一）
小林茂樹（絲一）
加美好男（絲三）
中津新一郎（絲一一）
三谷勝（絲一五）
角替越夫（絲一五）
鈴木保男（絲一八）
須江辨三郎（絲二〇）
横内豊彦（絲二二）
渡邊原田正彬（絲二二）
濱邊綱男（絲二三）
香三（絲三）
宮本靜雄（絲三）
市原安臣（絲七）
宮西憲二（絲七）
竹内方榮（絲九）
柴田久（絲一四）
菅尾源治（絲一五）

編輯室より

△二月號陣中便りが年賀狀の意味を含めて殺到した事とスキー遭難者記事があつた事及び弔慰文の爲めに十八頁と云ふ大册になつてしまつた。財政逼迫の千曲會々計に對し甚だ申譯無いと思つてゐる。然し之れでも大いに詰めた積りである。內容豐富にすれば經費が多くなる。經費を節約せんとすれば內容貧弱となる。重盛の身體此處に極るである。

△戰場便りは非常に多數になつたので本月號には校長、學校及び千曲會宛のものに限り掲載し其他は特別のものを除き悉く割愛した。又右宛のものでも通り一遍で興味なきものや印刷したもの等は載せなかつた。之の點悪しからず御諒承を乞ふ。

△先月時報編輯部の養蠶部をお願ひした許りの山崎甞錄氏（絲一九）が圖書課に轉ぜられ又改組の已む無きに至つた。で後任は町田博氏（蠶二一）にお願ひする事にした。前任者同樣御引立あらん事を乞ふ。之の處編輯部は御難續きと云ふ譯である。

△枇杷木氏の『原公を見舞ふ』、N生の『榊原敏男君を偲ぶ』、K生の『山形支會總會だより』は何れも一行十八字に書かれてなかつたので甚しく手數を要した。今後必ず十八字詰とせられ度い。『陣中便り』、『慰問狀に對する禮狀』の書面を全部原稿紙に書直してゐる編輯子に御同情願ひ度い。

△左記會員宛の時報は返戻されました。御最寄の方は御通知を乞ふ。

坂路善一（絲一一）　蟹江優（絲七）
山口正紀（絲七）　小山漬（絲一一）
大根田丑一郎（絲八）　加藤善一（絲八）
德永忠祥（絲一八）　入井三郎（紡六）
伊藤茂（絲二三）　芝崎龍三（絲三）
倉重ウメノ（舊教）

△母校學生七名が笠岳に於てスキー遭難者救助の美擧はよく記事を讀んで賞讃してやつて欲しい。唯彼等が餘り淡白で爲すべき仕事をなし終へるとさつさと引揚げた爲め多少他に功名を奪れた嫌ひがあり知る人の餘りに少きを惜しむのみ。

昭和十三年度蠶種案內

○交雜種
×浙華　龍仙江
×國蠶歐十九號
×國蠶支一〇七號
×國蠶支十六號
×國蠶歐十六號

○原蠶種
國蠶歐十八號（本年度配布優良品）
分離白一號
國蠶支一〇六號（春期五粒定粒用）
其他一化二化共特撰品あり
病蠶無皆
優良品種、適地分場、設備完全

廣島縣御調郡奥村綾目八六
蠶種業　小川保
電話　市村局一一一番
振替（廣島）二四六番（大阪）三〇七六三番
電報は市村局別便配達料不要